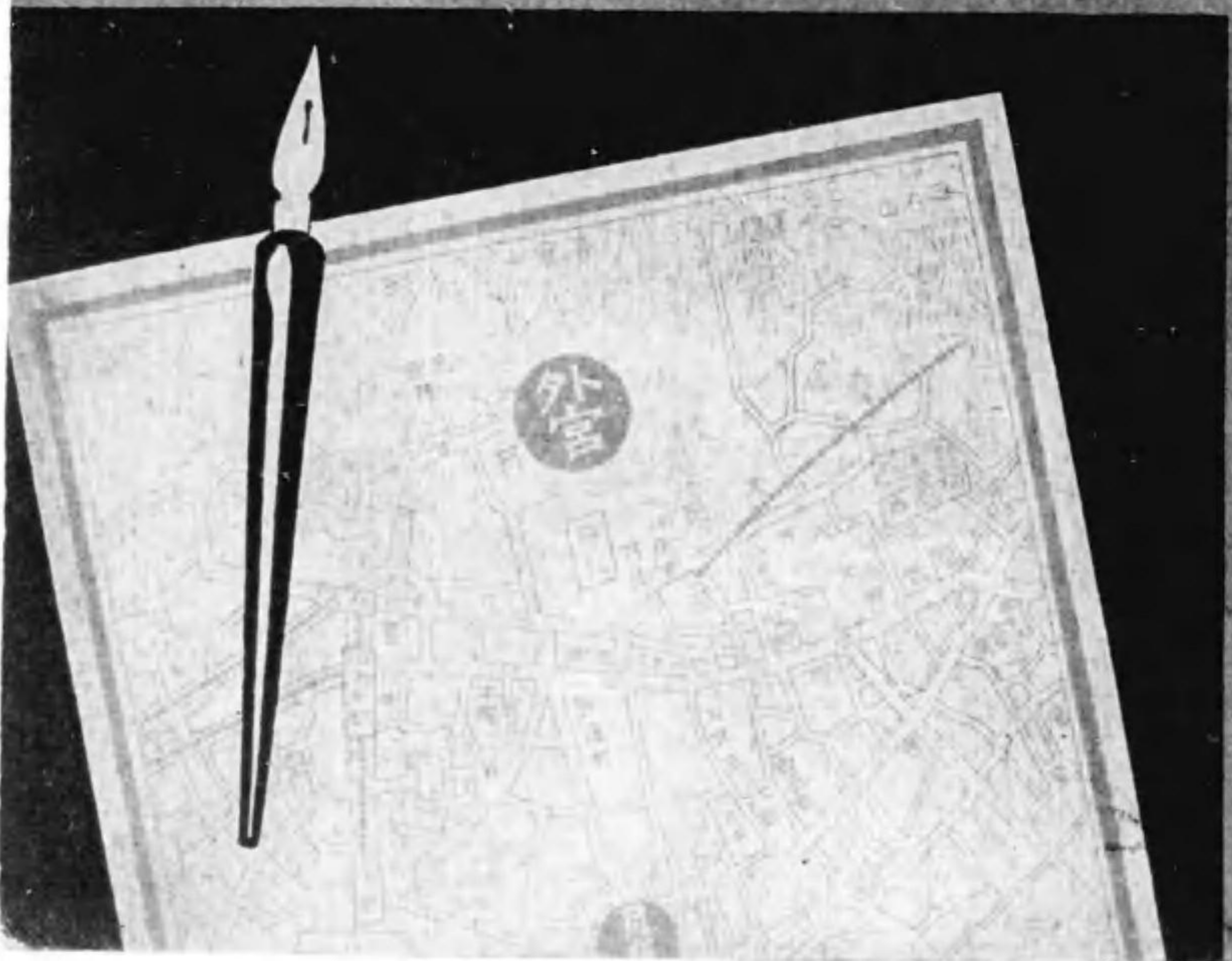


神都讀本



特233  
733



始



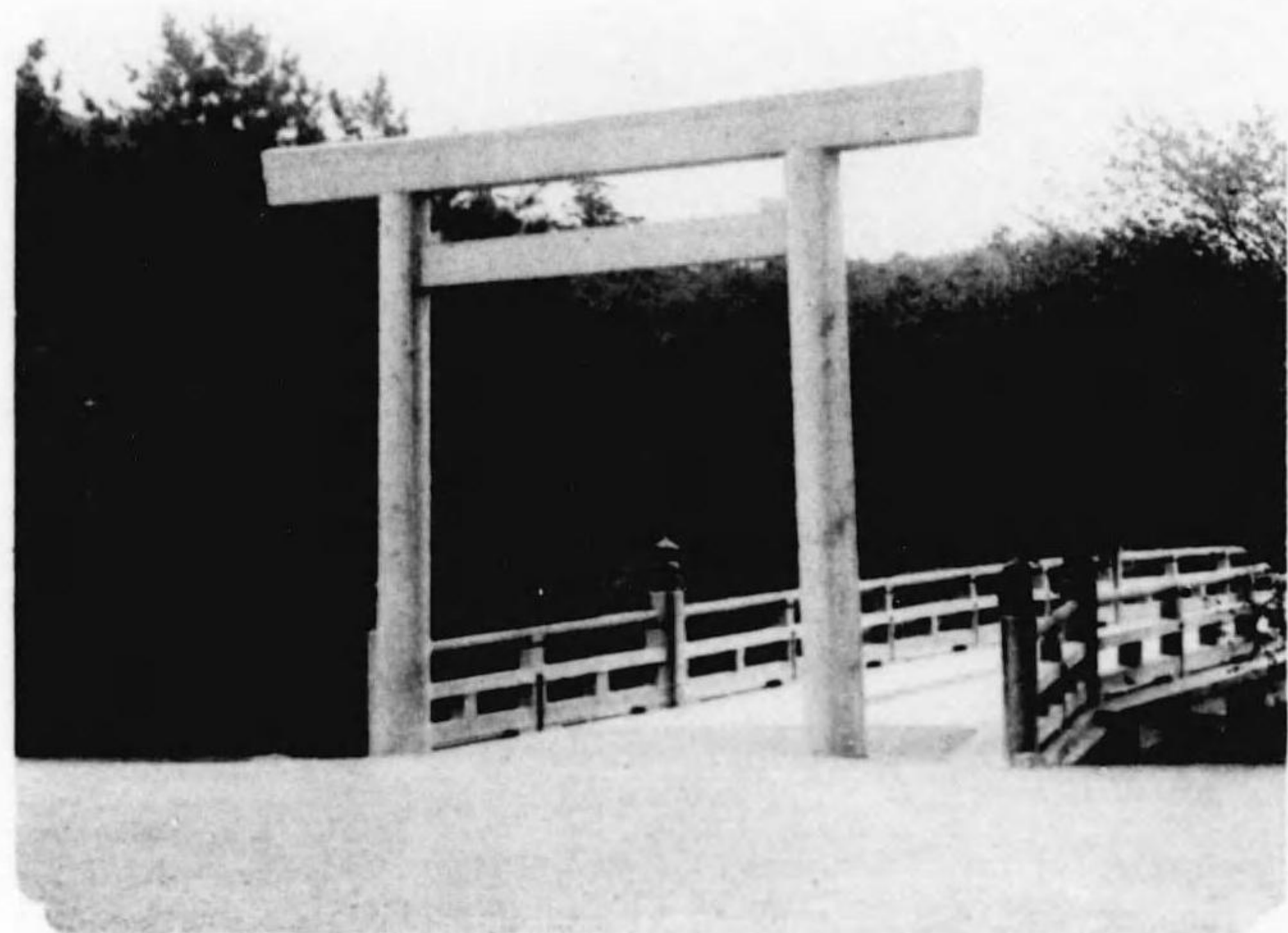
特 233  
733



神都讀本

宇治山田市教育會編纂





# 神都讀本 目次

<p>一 神宮奉頌歌……………一</p> <p>二 伊勢の神風……………二</p> <p>三 宮川堤……………六  <small>一宮川堤 二宮川の田樂</small></p> <p>四 度會家行の勤王……………三〇</p> <p>五 牛谷坂……………三三</p> <p>六 名奉行大岡忠相……………三六</p> <p>七 二見の浦……………三八</p> <p>八 川上源十郎……………三九</p> <p>九 杉田望一……………四〇</p> <p>一〇 傳説三つ……………四三</p>	<p>二 明治天皇御製……………四四</p> <p>三 昭憲皇太后御歌……………四七</p> <p>三 神宮參拜……………四九</p> <p>四 神樂……………五一</p> <p>五 五十鈴川……………五二</p> <p>六 猿田彦神……………五三</p> <p>七 倭姫宮……………五五</p> <p>八 大若子命と乙若子命……………五九</p> <p>九 勢田川……………六〇</p> <p>一〇 光明寺……………六一</p> <p>一一 結城宗廣……………六三</p>
--	---

三	朝熊ヶ岳……………	七	三	慶光院……………	二二
三	佛祖荒木田守武……………	七	三	出口延佳……………	二六
四	麥林舎乙由……………	七	三	倉田山……………	二九
五	俳句……………	八	三	月僊……………	三三
六	松木滿彦の恭儉……………	八	三	濱萩……………	三五
七	神都の今昔……………	八	四	足代弘訓……………	三九
八	通信交通……………	九	四	今様……………	四二
九	勢陽五鈴遺響……………	九	四	神都學藝概観……………	四四
一〇	神宮御用紙……………	一〇	四	神都の沿革……………	四五
一一	名物名産……………	一〇	四	統計に現れたる神都……………	五〇
一二	國學者宇治久老……………	一一	四	大神都特別聖地計劃……………	五三
一三	神宮の御祭典……………	一一			
一四	御田植……………	一二			

# 神都讀本

## 一 神宮奉頌歌

文部省撰

- |   |           |            |
|---|-----------|------------|
| 一 | 天地のむた窮みなく | 天津日嗣は榮えんと  |
| 二 | 千秋五百秋安らけく | 皇御祖のかしこさよ  |
| 三 | 神路の山の彌高く  | 瑞穂の國に幸あれと  |
|   | 天照る光仰ぎつつ  | 皇御祖の尊さよ    |
|   |           | 五十鈴の川の彌遠く  |
|   |           | たたへまつらん諸共に |

## 二 伊勢の神風

今からおよそ六百五十年昔のことである。

東は朝鮮半島から西はヨーロッパの中ほどまでも、うちしたがへた元の忽必烈は、わが國に、

「元の國にしたががつてみつぎ物をたてまつれ。」  
といつて來た。

鎌倉幕府の執權北條時宗は、

「日の出る國にたいしてぶれいなことをいふな。」  
と使の者をおひかへしてやつた。

すると忽必烈は後宇多天皇の文永十一年、二萬五千の兵をもつてわが對馬・壹岐や九州の北海岸をさんざんにあらした。

そしてさらに又使をよこした。時宗は大へんおこつて、

「よし、かくこのほどを知らせてやれ。」

とその使の者の首をきつてしまった。

さあ大へんだ。元の王がかん／＼におこりだした。

「生いきな日本をほろぼしてしまへ。」

と弘安四年十何萬の大軍を二手にわけ、海一ばいになつて九州さしておしよせて來た。

おそれ多くも龜山上皇は、經任大納言を勅使として伊勢へおつかはしになり、

「たとひ私の命はなくなりませうとも、この國難をおたすけ下さい。」とおいのりになつた。

九州の博多にはせあつまつた國中の武士は、老人も若者も皆、

「元の兵をみなごろしにせよ。」

と死にものぐるひになつてふせいだ。百しやうもまた男はもちろ

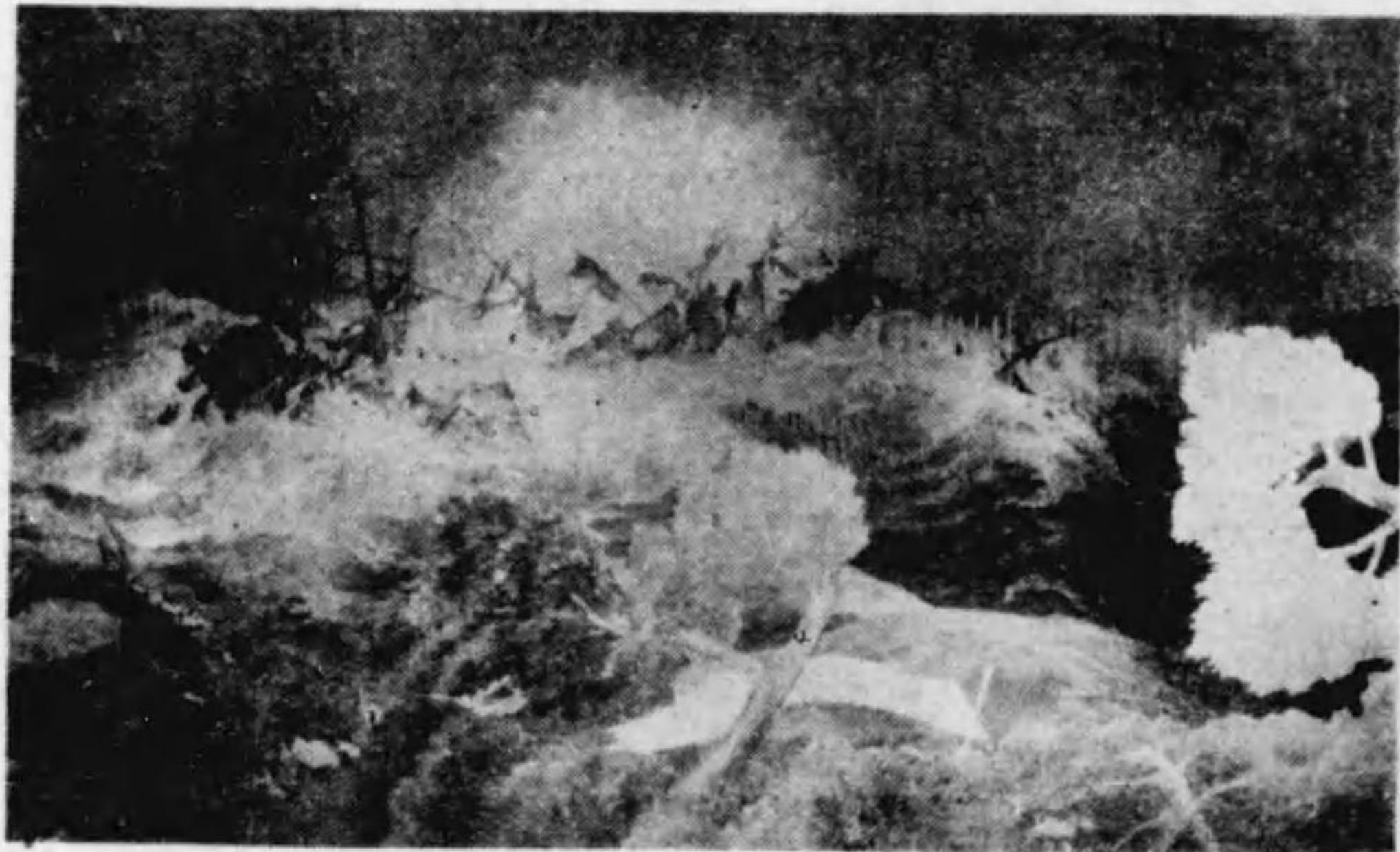
ん女、子どもまで、

「神の國をお守り下さい。」

といのりをさげながら、一生けんめいにひやうらうをはこんだ。この上下心を一つにして國難にあたつたま心が、神のおぼしめしにかなつたのであらう。七月二十七日、神宮境内の風の神の御殿がにはかにもものすくくなり動いた。しかもその音は三日の間もつゞいた。二十九日の夜あけがた東の空が白むころ、だしぬけに御殿から火のやうなま赤な雲がさつと西の方へとんだと思ふと、たちまちあやしい大風が吹きおこり、大きな立木をたふし、多くの小石をとばした。

まのあたりこの神の不思議を拜した内宮禰宜荒木田尙長・外宮禰宜度會貞尙等はひじやうにおそれ多く思つて、たちちにこのことを朝廷に申し上げた。

こえて七月三十日の夜中のことである。博多の沖では、にはかに雨をまじへたものすごい風が東の方から吹いて來たと思ふと、見る／＼中に山をならし海をわきかへらせ天地をくつがへすやうな大あらしとなつた。今まで多勢をほこつてゐた四千何百さうといふ元の船も、どうしてこの神風になはう。右に流され左に流され、岩にぶつかり浪にうたれて、ぶく／＼ぶく／＼すつかりしづんでしまつた。



(藏館念記都神) ふらはきふを寇元風神の勢伊

十何萬の大軍も生きてかへつた者はわづかに三人しかなかつたといふ。

神の不思議をおあらはしになつた風の神の社は、後に外宮のを風の宮と申し内宮のを風日祈宮かぜひのいのみやと申すことゝなつた。今、風日祈宮は内宮御馬屋の南、かうがうしい風宮橋をわたると右の方に、又風の宮は外宮多賀宮たがのみやの山の下、土宮つちのみやの東の方におまつりしてある。末の世の末までわが國は

よろづの國にすぐれたる國

### 三宮川堤

一宮川堤

上

僕は昨日お父さんに連れられて、宮川堤へ花見に行きました。

宮川堤で電車を下りますと、堤の櫻はすぐ目の前に見えます。昨日は日曜でもあり、天氣がよかつたので、堤は花見の人で埋つてゐました。遊園地ゆうえんちのそばの八重櫻はまつさかりでした。僕等は花のトンネルをくゞつて度會橋の方へ行きました。道ばたには店がたくさん出てゐて、風船ふうせんやいろ／＼のおもちやを賣つてゐました。堤の下にはでんがく小屋が色々のまくをはつて、お客を呼んでゐました。堤を下りてひろつばのしばふへ出て休みました。そこから堤の花を見わたすのは一そうきれいでした。

「お父さん、宮川堤の櫻は昔からこんなにくつくしかつたのでせうか。」

「いや、昔は花見など出来るやうな所ではなかつた。今の人が聞いたら驚くやうな所だつたのだ。」  
「どんな所だつたのですか。」

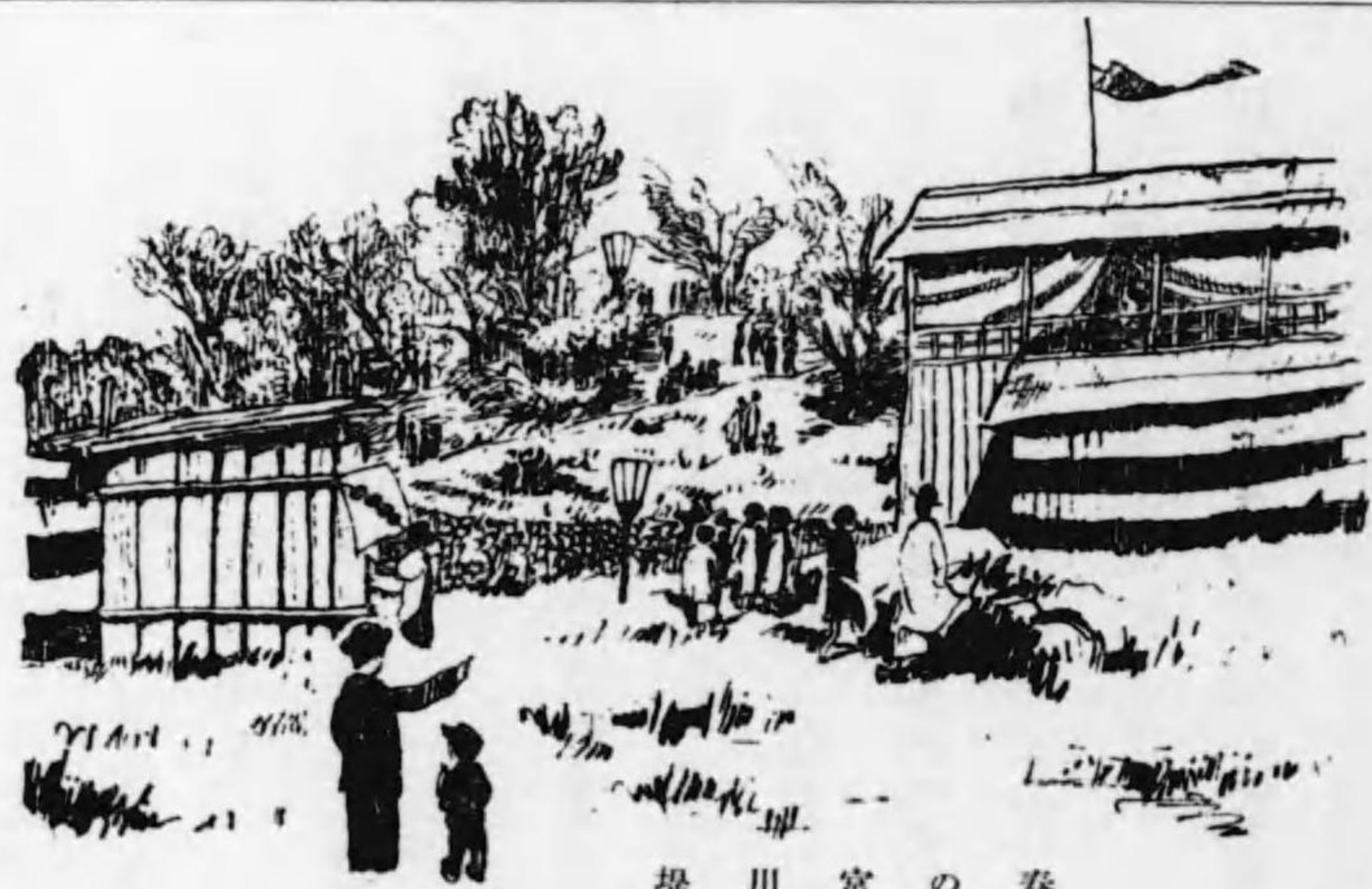


「それでは、今日は宮川堤についてくはしいお話をしてあげようね。」

「どうぞ。」

「昔は宮川の流れが三つにも四つにも分れて、山田の市中を流れてゐた。その中で、小太郎が池といつて、近頃までぬまになつてゐた所、あのへんで分れて、上の社のそばを通り、筋向橋から浦の橋に出て、高柳・新道の流れで勢田川にはいる川は、ほんとうにおそろしい川だつた。大雨がふると、にごつた水がどん／＼とこの川へおちこむ。そして見るまに此の川すぢ一めんはどろ海のやうになつて、家の中まで水がはいつてくる。疊たたみがつかる位はまだよいが、時には家が流されることさへもあつた。」

或年の夏の終り頃のことである。ゆふべからふりつゝいた雨で宮川は非常に水が出た。黄色がかつたどろ水が川一ぱいになつて



春の宮川堤

ものすごい勢であつた。

『堤が切れては大へんだ。』

といつて、町の青年や消防夫たちが、雨の中を土俵をつくつて堤の上に積んでゐた。お晝頃になつても雨はなかく／＼やまず、川の水はだん／＼ふえるばかりであつた。『ふうーふうー』ほらがひが氣味悪いひゞきを立て、鳴り出した。町の家々では、たんすや長持を二階へ運ぶやら、年よりや子供を安全な所にひなんさせるやらで、上を下への大さわぎ。水は一そうふ

えて堤の上をこしはじめた。堤のはらに穴があいて水がふき出して来た。青年たちが一生けんめいに土俵を堤の上に積重ねたり、穴をふさいだりしてゐた。

さつきから堤の上に立つて、じつと水のやうすを見てゐる一人の男があつた。

『大へんなことになつて来た。此の堤が切れたら堤の下の家は皆流されてしまふ。そして其の家と共に、男も女も、年よりも子供も皆どろ水にのまれてしまふのだ。あ、かはいそうに。』とひとりごとをいひながら、東の空に向つて神様にいのつた。

水はだんくへりはじめた。『お、水がへりはじめた。ありがたい。神様のおかげだ。』といつて其の人が川の水を見つめてゐた時川上から黒いものが流れて来た。

『もおうー、もおうー。』

『おう、かはいさうに牛が流れて行く、助けてやりたいが此の水では何ともしようがない。』といつてゐるうちに、こんどは大きなものが流れて来た。

「あつ、家だ。」

家の上に人がしがみついてゐる。しがみついたまゝ、堤の上の人を見て、『助けてくれー、助けてくれー。』と聲をかぎりにさけんでゐる。三つ位の子供をしよつた女の人も、かなしさうな聲をはり上げて『助けて下さーい。』と泣きさけんでゐる。

堤の上の人たちは『何とかして助ける工夫はあるまいか。この大水では舟も出せないし。』と皆氣をもんでゐるばかりでどうすることも出来ない。だんくへり近づいて来る。と見るまにその家が何かにぶつかつた。するとぐらぐらつとゆれて今まで水にうかんでゐた所が水の中へはいつて、それと一しよに三人の親子の姿も見え

なくなつてしまつた。

堤の上に立つて水を見てゐた男の目には涙が光つてゐた。」

下

「其の年の秋の或日のことだ。町の人達が集つて『どんな大水が出て堤が切れないやうにしたいものだ。』といつて相談してゐる。その時一人の男が『人柱を埋めると、どんな大水にも堤が切れないさうです。』といつた。」

「人柱といふのは何ですか、お父さん。」

僕は思はずお父さんにたづねた。

「人柱といふのは生きてゐる人を堤の中へ埋めこむのだ。」

「生きてゐる人を？かはひさうですね！」

「かはひさうだ。今ではそんなことはゆるされもしないが、昔はこんなことがあつたのだ。」

さて、その男といふのは、夏の大水の時、流されて行く人を見て涙をこぼした人で、名を松井孫右衛門といつた。」

「どこの人ですか。」

「中島町の中野の人だ。」

「さうすると『人柱のことは私も聞いてゐますが、誰も人柱にならうといふ人がありません。』といつて作吉といふ人がみんなの顔を見まはしました。が、すぐに孫右衛門は『私とその人柱になりませう。』といつたので、皆びつくりして孫右衛門の顔をながめた。孫右衛門が言つた。『私は夏の大水の時、流されて行く人を見てかはひさうでなりません。あの時向ふ側の堤が切れたので此の町の人達は助かつたのですが、もしこちらの堤が切れてゐたらこの町にも流された人がたくさんあつたにちがひありません。人柱を埋めたために堤が切れないやうになつたら、どんなに町の

人達が喜んでくれませう。大ぜいの人のためです。私が人柱になります。』

それからといふものは、家内のものどもの泣きかなしむのも、親類の人達がとめるのもふりきつて、孫右衛門は『大勢の人のためだ。後の世のためだ。』といひつゞけて、いよく人柱になることに決心した。町の人々は涙ながらに埋めた。『なまけてゐては孫右衛門さんにすまない。』と言つて土を運ぶ人も、槌で打ちかためる人も皆朝早くから日の暮れるまで、毎日々々一生けんめいに働いた。幾日かの後丈夫な堤が出来上つた。

町の人々は、孫右衛門の石像をきざんで堤の上におまつりした。遊園地の西の堤の上にまつられてあるのがそれだ。歸りにおまゐりして行かう。

宮川堤はかうしてりつばに出来上つた。もちろん、其の後も度々

堤をなほしたり、つきだしたりして今日のやうな丈夫なものになつたのだ。それから櫻が植ゑられて、春が来れば人々の楽しい遊び場所となつたのである。

われ／＼がかうして楽しく遊ぶことの出来るのは、第一貴い人柱のおかげであることを忘れてはならない。

孫右衛門は死んだ。けれども其の名は宮川堤の花と共にいつまでもかゝやくことであらう。』

お父さんは話し終へて、

「では、これから孫右衛門さんの石像を拜んで歸るとするかね。」  
と言つて僕の手を取られた。

## 二 宮川の田樂

花盛りの宮川は日曜のこととて朝から人出が多い。

僕等は、かはらの若草の上に三枚のうすべりを敷いて陣取つた。やがて茶屋の下女が、お菓子や田樂てんがくを運んで來た。お祖父さんは、

「あ、きれいだ。今丁度見頃だ。」

と言つてしきりにお祖母さんとほめてゐる。其の時姉さんが、ふと思ひ出したやうに、

「田樂は誰が始めて賣り出したのでせう。」  
と言つた。

「それは昔の人さ。」

と僕が言ふと、

「それは言はなくともきまつてゐますよ。誰かと名を聞いてゐるんですよ。」

と姉さんがおこつて來た。

之を聞いてお祖父さんが、

「それはお前たちは知るまいが、中島町の伊之助といふ人が賣り始めたのだ。」

「伊之助つてどんな人でしたの。」

と姉さんが問ひ返した。

「話をしてあげようか。」

「はい。」

と言つて姉さんも僕もお祖父さんの顔をのぞきこんだ。

「今から二百年ばかり昔、元祿の頃中島町に伊之助といふ者があつた。家のごく貧乏であつたから或時ふと思ひついて、宮川で焼豆腐を賣つて見た。ところが一寸珍しいのでなかくよく繁昌した。長男は江戸の商家に奉公してゐたが『相當にもうけがあつて貯金も大分出來ました。衣食の費用は送りますから、どうぞ田

樂賣は止めて下さい。』と幾度も手紙を送つて願つたが承知せず、七十歳までそのまゝつゞけてゐたといふことだ。そして其の後は次男にやらせてゐたといふことである。此のお祖父さんが賣り始めた田樂は、今でもかうして花見には附物のやうになつてゐる伊之助ちいひは地下でさぞ満足してゐることであらう。』

「此の人はなかく感心な人で、自分の子供が、かはらで財布を拾つて來たのを、中もあけさせずに直ちに舟渡番人の所へ行つて『此の財布を落した主に渡したいから三方へ届けてくれ。』といふと舟渡番人は『そりや天からのお授けじゃ。そんなものを届ける馬鹿があるかい。それより酒でも買つて、おいらに一杯おこれ。』と言つたが伊之助はきかずに三方へ届け出た。

其の翌日一人の旅僧が來て『彼の財布の落し主でありますから渡

して下さい。』と伊之助に頼んだ、伊之助は其の僧と問答した後いつはりでないことが確められたので、其の財布を僧に渡した。中に金二十両ばかりあつたから、僧は其の中の金三兩を出して『御禮の印までに。』と言つて伊之助に渡したが伊之助はどうしても受けなかつた。僧はその正直に感じ厚く禮をのべて歸つた。まだ伊之助さんのえらい話がある。

伊之助さんは水泳が上手で、參宮客が垢離をとる時溺れて死にかけた者をひきあげて活かすことが、ながい間には數知れぬ程あつた。又此の人は遺言して、

- 一 凡て人の落したものを拾つて私してはならぬ。
  - 一 洪水の時流れて來た材木を拾つてかくしてはならぬ。
- と言つたさうである。此の遺言によつても伊之助ちいひの正直なことがわかるだらう。」

とお祖父さんの昔話がすんで、宮川の堤の上を見たら花見の客で一ばいであつた。

#### 四 外宮禰宜度會家行の勤王

正平三年七月十二日、東の空が白む頃大湊の濱邊には馬のいな、き、人の聲。

「すは戦よ。」

と里人が濱邊へ走つた時は、目の前に山のやうな船が五艘も浮んでゐた。そしてよろひかぶとに身をかためた士たちが順々に船の中へ入つて行く。やがてともづなをとかれた五艘の船は神風を飛ばし帆を受けて次第々々に朝霧の中へかくれて行く。

「あゝ、勇しい船出じやどうぞ勝ち軍でありたいものじやのー。」  
「こんどはどこへお立ちじやな、陸奥かな。」

「いやちがふ、すぐむかへの尾張じや。」

「あゝ、さては尾張の宮崎の……。」

と里人は此の勇しい船出を見送つた。

軍船は廣々とした伊勢の海を乗りきつた。やがて尾張の宮崎の古城には五三の桐の旗印が吹く朝風にひるがへつてゐた。

これを眺めた賊軍は、

「さては北畠の一族じやな……。」

「すておけば一大事。」

と古城をさしておしよせた。

弓を引く音、矢の飛ぶ音、ときの聲いりまざつてやかましく戦ははげしい。彼方は大勢此方は小勢ではあるが、忠義に勇む兵ぞろひ、賊は破られ破らる。これではならんと賊は後から後から新市の兵を送る。戦の眞最中城の一角から火の手が上り、見る見る中

に城は火焰に包まれた。

「合戦はこれまで……さあ早く落ちられよ。」

とさけびつゝ、春日侍從中納言北畠顯能の前に息せききつてかけつけたのは、度會家行であつた。

見ると老の白髪は朱にそまつて、曲つた腰のあたりには、矢が一寸ぢさゝつてゐる。

「御自害無用、さあ早く〜。」

とせき立てせき立て山田をさして引上げた。

此の合戦に膝腰をいためた家行は、再び起つことが出来なくなり、正平六年九十六で恨を残して世を去つた。

此のやうに義旗を舉げて、王事に勤めた家行は、類聚神祇本源といふ書物を著して、神をうやまふ道を世人にお示しになつたえらい人であります。

## 五 牛 谷 坂

### 一名の起り

牛谷坂は、宇治から古市に至る間の坂である。昔、斃れた牛や馬を棄てたので、自然に牛谷と呼んで來たといひ傳へてゐる。

### 二 氏富長官の普請

昔は此の坂は、道幅が狭い上にけはしい岩の間からは、水が流れ出て諸國からの參詣人は非常に難儀をした。

延寶  
凡そ二百五  
十年前

延寶の頃、藤波氏富長官が外宮に參るため、こしに乗つて此の坂を通つた時、一人のおばあさんが、杖をつきながら、此のけはしい坂を登つて來た。

おばあさんは、坂の中程へ來たとき腰をのばして、



「参宮客はさぞ難儀をするであらう。せめて尾部坂のやうであるなら……。」

とひとりごとを言つてゐた。

長官はこれをきいて深く考へさせられた。後、山田奉行へ牛谷坂の普請を願ひ出て、私金數百兩を投じ、延寶二年八月から大勢の人夫をやとひ、自ら普請のさしづをして、道幅を廣くし、けはしい所は削つてゆるやかにした。

此の普請中に大きな岩石が落ちて、死んだ人夫が七人、傷ついたものも多かつたがこれにくじけず、負傷者を看護して普請をつけたので、此の後、参拜する人々は大へんらくになつた。

### 三 千束屋りとの公益

古市町に千束屋といつて、芝居の貸衣を業としてゐる家がある。

此の家に今から百年程前、りといふおばあさんがあつた。此のおばあさんは、儉約家で新しい箒を買ふと、其の柄を十五六握切りとつて、短いのを使ふことにしてゐた。これは柄が長いと疊にさはることが強く、したがつて箒をいたためやすいから、殊更短くしたのである。

又火吹竹には二つの穴をあけて用ひた。一つの穴は火吹竹の底へ、一つの穴は先の横へあけた。吹く時には横の穴をふたさなければ息がもれるから此の穴を指でふたして吹かねばならぬ。餘り火吹竹を火に近づけると穴をふたしてゐる指があつい。それで自ら火に遠ざかり、火吹竹の底をこがすことがなく、長い間使ふことが出来た。こんなことから、時々下男や下女がこまかい人だとかげ口を言つてゐたが、りとは平氣で尙儉約をつけた。

當時牛谷坂は、岩がくづれ石が出て往來に何人も困つてゐた。こ

文化二年竣工  
凡そ百二十年  
前

れを見てりとは氣のどくに思ひ、儉約してたくはへた金千兩を此の坂の普請料として差出した。此のために曲つてゐた道路が眞直になり、往來の人々は大へん便利になつた。

### 六 名奉行大岡忠相

名奉行とうたはれた大岡忠相は、今からおよそ二百年前山田奉行をつとめてゐました。

忠相が山田奉行になる前に、山田と松阪の農民が土地の境について争ひ、奉行が代るたびに裁判を願ひ出ました。

其の争ひを調べると松阪方の悪いことは明かですが、松阪は紀伊家の領地でありますから、奉行は常にその威光を恐れて是非をきめかねてゐました。

忠相が山田奉行になると、また此の事を訴へて來ました。そこで忠

相は直に自ら其の土地を巡視して、細かに取調べた上、はばかるところなく杭を打ち直して領分を明かにし、松阪方を罰して永らくつづいてゐた争を裁きましたので、人々はその剛直に驚きました。

又徳川八代將軍吉宗がまだ若くて紀州に居た時、阿漕浦の殺生禁制の地に網をおろして無法な行ひをしましたが、役人は徳川氏の威光を恐れて見て見ぬふりをしてゐました。それを聞いた忠相は捨ておくべきことでないと、自らその調べをしたこともありません。

人々はその正しいことに舌をまかぬものはなかつたといひます。後吉宗は將軍となりましたが、忠相の公平を見ぬいて江戸町奉行として重く用ひました。

### 七二見の浦

二見の浦は昔から神宮に深いゆかりのある土地であります。

今からおよそ二千年ほど昔のことでありました。倭姫命が天皇のおいひつけで、天照大神をおまつりするところをお定めになりました。その時二見へもおこしになりましたが、お出むかへ申し上げた大若子命に、

「この國の名は何といふか。」とおたづねになりました。する



二見の浦

と、

「二見の國と申します。」

とおこたへになりました。

二見といふ名はずるぶん古くからいはれてゐたものとみえます。

そして、この時この國の佐見都姫命もお出むかへになつて、堅鹽をたてまつられましたので、今でも立石崎の西、莊の海岸にある御鹽殿は、神宮にお供へする大御饌料の御鹽をそこで焼いておをさめするところとなつてゐます。

有名な立石のあるあたりを清渚といひます。水がよくすんで美しい海岸といふ意味であります。昔から濱參宮といつてここで身をきよめ、神宮に參拜するといふならはしになつてゐます。

海岸は一たいに白い砂と青い松が遠くつづいてゐます。晴れた日には知多半島や伊良湖崎が手にとるやうに見えます。音無山の

ロープウェーが山のみどりに浮び、沖には白帆がうすもやの中からあらはれては鳥かげにかくれて行くのがまことにのどかであります。ことに雲のないあけ方、立石の間にまつかなまんまるい太陽があらはれて、波の上にくらくくとかがやいてゐるのは、まるで繪のやうであります。又海は遠淺で、夏になると海水浴の人々でたいそうにぎはひます。

### 八川上源十郎

「おうい、こんな物が出て来た。」

枯草の上に坐りながら穴を掘つて遊んでゐた一人の子供が、かう言つて友達を呼びました。高く差し上げた右の手には、金色に光る物がにぎられてゐます。飛ぶやうにして集つてきた子供等はそれをたがひに手にとつては、

「何だらう、何だらう。」

と首をかしげました。その中の一人が、

「小判やないか。」

と叫ぶと、皆口々に、

「さうや、きつとさうや。」

と言ひながら、町の人々に知らせに走りましました。大さわぎになつて、なほよく掘つてみると、小判が二百七十枚、其の他のお金が二千五百個ばかりも出ました。

これは明治三十八年の出来事ですが、さてその場所はどこだつたのでせう。

昔、久世戸町に大きな味噌屋がありました。六代目の主人にあたる川上源十郎は、大變なさけ深い人で、質素なくらしをしながら家業にはげんで居りました。

天保八年のことです。田の物も畑の物もみのりが悪くて、お米のねだんばかりがびつくりするほど、高くなつてきました。食べ物に困つた末には草の根まで掘つてかちつたり、水ばかり呑んで居る人もありました。しかしそんなことで何時までも暮せるものではありません。遂には氣の毒にも、うゑて死ぬ人まで出来てきました。

思ひやりの深い源十郎です。どうしてだまつて見て居られませう。急に小屋掛をし、そこで粥かゆをにて、なんぎな人にはいくらでも食べさせました。そればかりではありません。夕暮になるとそつと使をやつて、貧しい家にお米やお金などを、だまつて入れさせたりしました。

又其の頃、汐合には橋がなく渡船であの川をこしてゐましたが、その賃錢が定まつてゐなかつたので、時には大變高くとられたり、

或は船頭がなまけてゐて中々船を出さなかつたりして、人々は大そう困つてゐました。

源十郎はこの不便を除くために、たくさんのお金を山田奉行所へ寄附しました。奉行所でも喜んで、源十郎の申し出た通りそのお金を渡場の費用にあてて、此の後十年間は一切渡賃を取らぬことにしました。

色々と世のためにつくした川上源十郎は嘉永七年三月に世を去りました。たくさんのお金が掘り出されたのは、その屋敷跡での事でありませぬ。

### 九 杉 田 望 一

今から三百年ばかり前にはあきめくらが多かつたのにまことのめ

くらでありながら、音楽にも易にも俳句にも上達してゐた杉田望一といふ人がありました。

或朝、起きたばかりの望一は縁に立つて庭の方を向いてゐますと、庭のしげつた竹やぶの中から、

「ホウホケキヨウ」

と鶯の聲がしました。

「あ、春だな。」と思つたとき、

「ホウホケキヨウ」

と今度は縁の方からやさしい鳴聲が聞えました。

これは望一が日頃大層かはいがつてゐた籠の鶯の聲でありました。この鳴聲を聞いて望一は、

おのづから鶯かごや園の竹

と静かに口ずさみました。

又、夏の夕方、緑の色深い木立の下で休んで居ますと、ほととぎすの一聲が頭の上でしました。望一が見えぬのに空を向いたときは唯銀色の星が空一面にひろがつてゐて、涼しい風が顔をなでて行くのみでした。

それと聞く空月もがな時鳥

と直ちに詠みました。この俳句が其のあたりの景にびつたりと合つたので誰でも感心しました。

望一はめくらであつて、初め荒木田守武の俳風をしたひ、後、松永貞徳について一心に學んで、此の道の大家となり、遂に山田の望一の名が宮中にまで聞えたといふことであります。

名高い弟子に杉木みつ女、岩井一有等があり、著書には伊勢山田俳諧集・望一千句・望一後千句等があります。

## 一〇 傳説 三つ

### 一 仙人の碁盤石

五ヶ所街道から仙人谷のけはしい道を一里ばかり入った神路山中に、其の形の碁盤さばんによく似た石がある。これを仙人の碁盤石と呼んでゐる。

昔、宇治の里に一人の樵夫かきがあつた。或る日神路山に入り其の歸るさ、谷川のほとりまで來ると、仙人らしい人たちが大勢集つて碁を打つてゐる。何心なくこれに見とれてゐる中、杖にしてをつた斧の柄がボツキリ折れてしまつた。驚いてあたりを見まはすと、仙人等はいつの間にも消え失せたか、そこには碁盤石だけがさびしく残つてゐる。

樵夫は夢のさめた様な心持になつて、ふと手もとを見ると、不思

議や斧の柄はすっかり腐つてゐる。これは大へんと更に足もとを見ると、白いひげが長くく地上にたれ下つてゐる。これはきつと狐か狸の仕業しわざにちがひないと、大いにおち恐れ、逃げるやうにして家にはせ歸つた。

歸つて見ると、これは又どうしたことか、自分の家もなければ、一人の知る人もない。世の中の様子がまるつきりかはつてゐる。あきれかへつた樵夫は、それから名も知らぬ里人に助けられて、其の餘生を送つたといふことである。

### 二 天の岩戸と神仙

外宮の南方、高倉山に大きな岩屋がある。天の岩戸かまのいわとといつて明治の初頃まで伊勢名勝の一つに數へられてゐた。この岩戸は天上のそれをかたどつたものだともいはれ、又原始時代穴居の跡だともいはれてゐる。

岩屋はまだこの外にもたくさんあつたらしく、昔外宮の後の山には岩屋が四十八箇所もあつて、いつも夜になると、に多くの神仙が集つて遊宴を催すのか、賑かな囃はなの音が聞えて来る。それで翌朝岩屋に行つて見ると、今まで人が坐つて居たかの様に、石の面にぬくみが残つてゐたといひ傳へられてゐる。

昔、外宮では毎年十一月下旬に吉日を選び、山宮谷でお祭が行はれた。そして此の祭がすむと、誰も後をふり向くことが出来ない。かけ足で歸るならばしになつてゐた。

然るに或年の祭の歸り、長官(宮後長官であつたといふ)が途中で、大切な物を入れた疊紙たたがみを、そこへ忘れて来たことに心づき、召使の者にひき返して取つて來ることを命じた。召使は主命いなみがたく、恐る恐る取りに行つた。ところがそこには男女の神仙が大勢集つて、今や遊宴をはじめやうとしてゐる。神仙は召使の姿を見ると、

「今時分、人の來べきところではない。お前は何しに來たのだ。」と、とがめた。召使は色を失ひ、とぎれ／＼に事の由を告げて、其の罪を謝した。すると神仙は、

「然らばこの疊紙は渡してやる。しかし我々がこゝで遊んで居つたことを決して口外してはならぬ。もしこの約束を破つたらお前の命はないぞ。」

といつた。

召使はそれから堅く口を閉ぢて一切この事は誰にももらさなかつたが、其の後長官家を退いて江戸に出で、商賣にはげんで相當に暮して居る中、或夏の夜、近所の誰彼と涼臺でかつて出あつた恐しい話を語り合ふことになり、

「年も大ぶんたつたことでもあり、又山田のことをこゝで話をするのだから何もかまふことはないだらう……………」。



と外宮の山で神仙に會つたことを話した。すると其の話がすむかすまぬに件くだんの男は頓死してしまつたといふことである。

### 三 白大夫の袂石

船江町に金剛寺の藪といふのがある。吹上町から船江町に通ずる八間道路の東側にある藪がそれである。この藪の中に菅原の社といふ祠ほこらがある。其の傍に大いさ二メートルばかりの石があつて周圍に垣がめぐらされてゐる。此の石を「白大夫の袂石たもといし」とか、たゞ「おそで石」とかいつてゐる。松木家の祖、春彦は俗に白大夫ともいつた。昔、菅原道眞公がむじつの罪をうけて九州へ流された時、春彦も菅公の御供をして九州の地に下つたが、其の後暇を乞ふて歸る途中、播磨の袖ヶ浦で小石を拾つて袂に入れ、持ち歸つて此所に置いた。

然るに此の石不思議にも年々大きくなつて、遂に今日見るやうな

大石になつた。そこで祠を建て、天満天神をまつつたのださうである。

## 一一 明治天皇御製

### 社頭祈世

とこしへに民やすかれといのるなる

わがよをまもれ伊勢のおほかみ

### 社頭月

ちはやぶる神路の山にてる月の

ひかりぞ國のかゝみなりける

折にふれて

あまてらす神のみいづを仰ぐかな

ひらけゆく世にあふにつけても

新年

神風の伊勢の宮居の事をまづ

今年も物の始にぞきく

立春日

ちはやぶる神路の山をいづる日の

光のどけく春たちにつけり

神宮造營ありけるころ

社頭月といふことを

この秋は内外の宮にてる月の

かけいかばかりさやけかるらむ

河

國民もつねに心をあらはなむ

みもすそ川の清き流に

一一 昭憲皇太后御歌

社頭祈世

神風の伊勢の内外の宮柱

ゆるぎなき世をなほ祈るかな

新年河

しづかなる世のとしなみは神風の

五十鈴川よりたちかへるらむ

社頭杉

あらたまの今年を千代のはじめにて

いやさかゆらむ伊勢の神杉

### 一三 神宮参拜

#### 外宮

今日は僕等の學級の参拜日である。朝會がすむと直ちに先生につれられて、先づ外宮様に参拜した。

火除橋を渡ると、手洗場の前に楠の老樹がある。先生は

「これは清盛楠といつて、昔、平清盛が勅使として参向のとき、冠がこの樹の枝にかつたので、其の枝を伐り拂つたから此の名が残つてゐるのださうです。」

と、おつしやつた。

一の鳥居をくぐると、右側に行在所がある。明治二年明治天皇が初めて神宮御親謁の際、御駐輦になつた所である。

神樂殿を過ぎると、はや御正殿の千木・かつを木の金具が朝日に

かゞやいてゐるのが拜される。

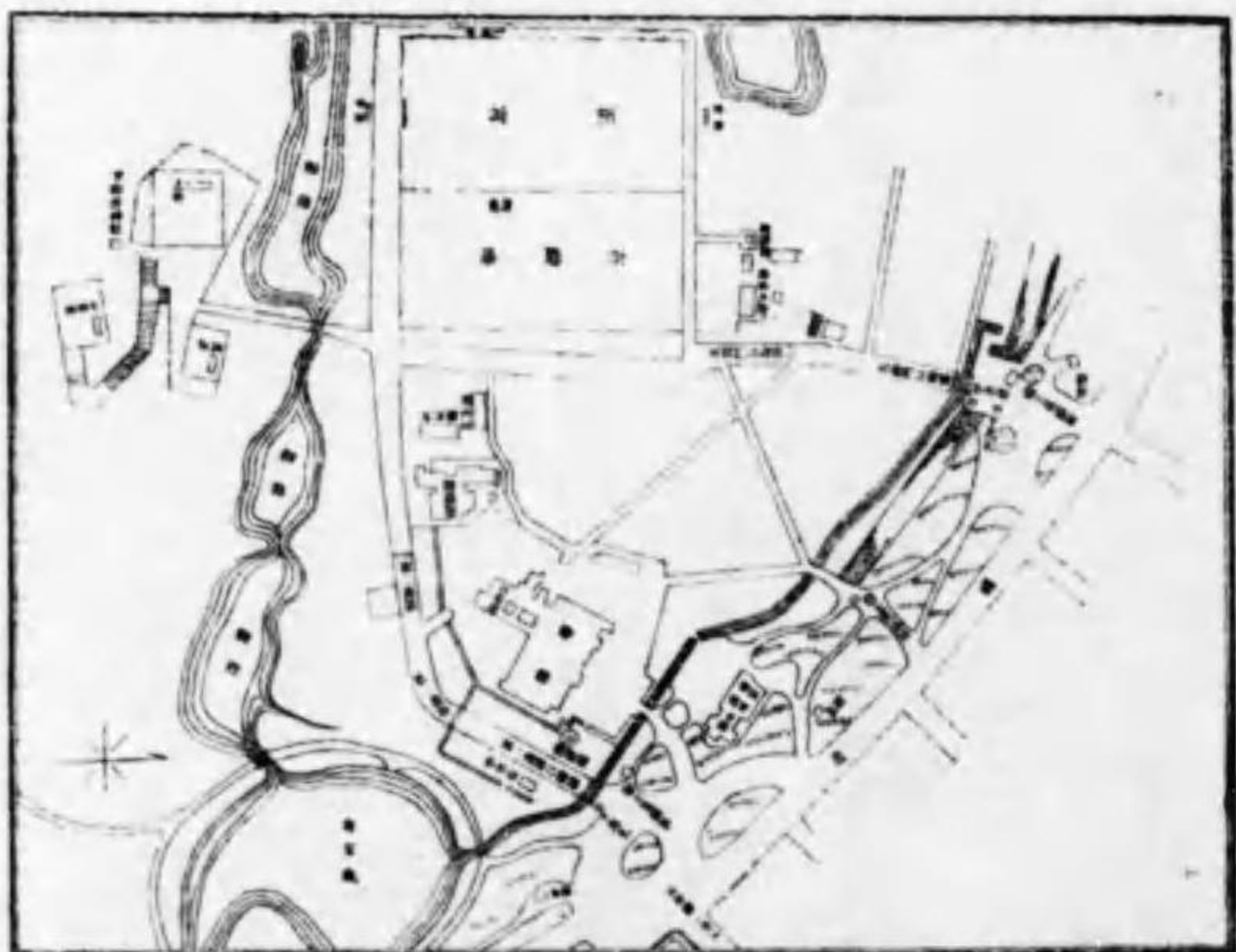
板垣御門を入り、外玉垣御門の前に整列して恭しく拜し奉る。

先年、奉仕したお木曳のことや、

お白石持の際、内院に参入して御正殿をま近く拜したことなどを思ひ出して、一層かたじけなさが身にしむ。

お宮の前の池にはたくさん鯉がある。池に沿うて南へ行くと小高い所に多賀宮がある。土宮・風宮

へも参拜して、もと来た道を通つて神苑に出で、勾玉池のほとりで一休した後、内宮様へ向つた。



豊受大神宮々略略圖

内 宮

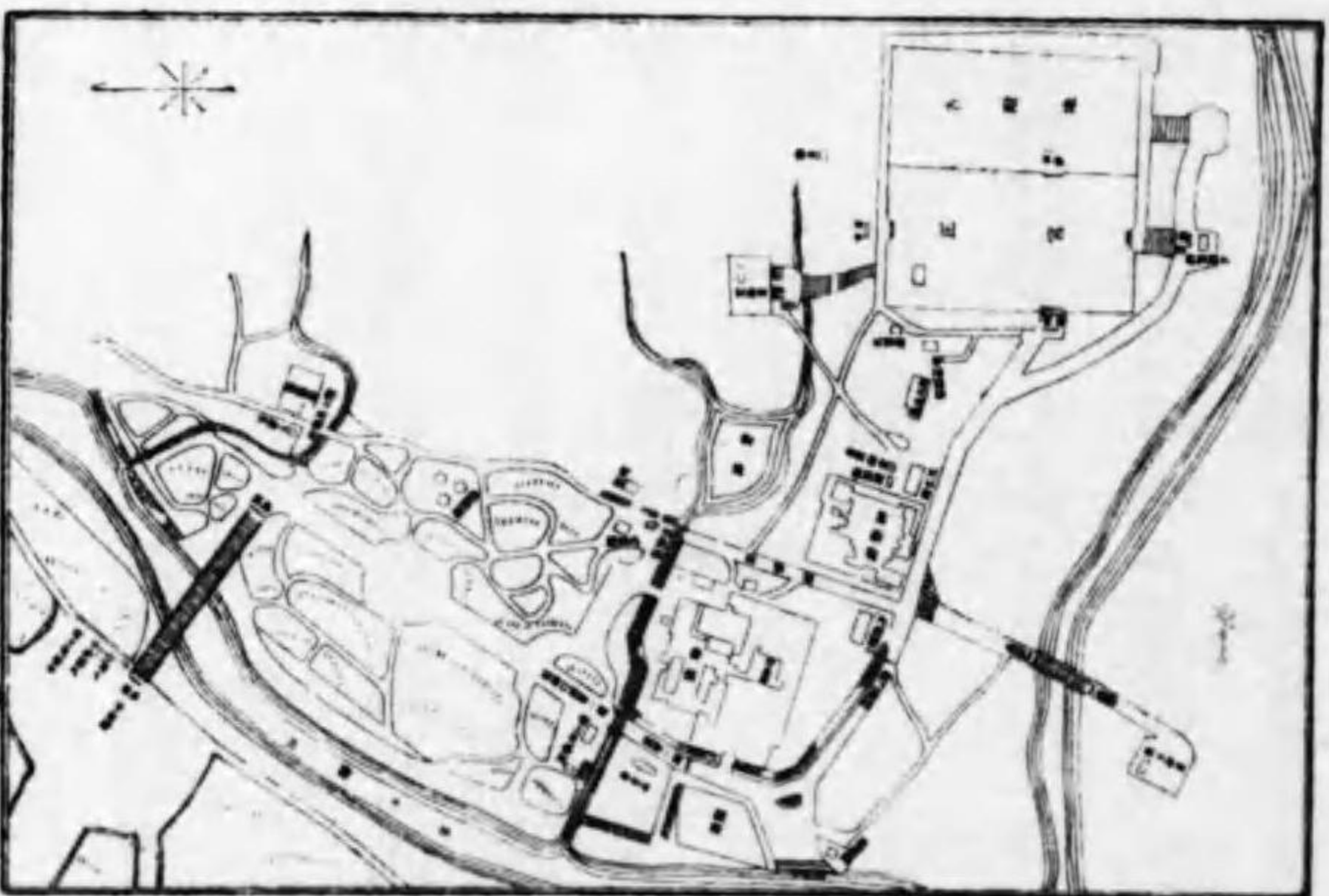
宇治橋の上で、先生は

「私達の子供の頃までは網受けといつて、此の橋の下の磯かきに、長い柄のついた網を持った人が幾人も居て、参宮客の投げ與へる錢を巧みに受け入れたものです……。」

といつて面白いお話を聞かして下さつた。

塵一つ止めぬ神苑には梅・松・櫻等を植ゑ、其の間には日清・日露兩戦役の戦利砲や、日本海々戦の記念砲身塔等が目につく。

一の鳥居をくゞつて五十鈴川の清き流で手を洗ひ口をすゝいで、御馬屋・神樂殿の前を過ぎ、神代ながらの杉の大木枝を交へて高く天をつく間を僕等は列を正して進み、御宮の前に到り謹みて拜し奉る。



圖略域々宮神大皇

僕等の心から唱ひ奉る神宮奉頌歌は神路の山にこだまして、神々しさたとへるものもない。

こゝで先生はかたちを改めて、

「昭和五年九月二十五日のことです。東御敷地の舊御正殿軒下の雨落際にあたる所に、一本の稻穂が見事に成長してゐるのが發見されました。御遷宮直後の、古來御蔭おかげ詣まがりの年とせられてゐる此の御年柄に、全く聖代の瑞兆と申すべきお目出たい事なので、この稻を『瑞垣』と命名されました。採取した

『瑞垣』は將來神宮の御饌料田用の種子とするため、三重縣農事試験場と、三重高等農林學校とに栽培方を委託されましたが、大變生育が良好で神宮御饌料田用として申分がないとの事であります。」と話された。

それより、神殿の裏手に廻つて荒祭宮あらまつのみやに參拜し、神樂殿の前に戻り、風宮橋を渡つて風日祈宮を拜した。

僕は讀本で習つた「神風」のことを思ひ出しながら歸途についた。

### 一四 神樂

神宮に參拜しようとして、あの清冽せいれつな水で手を洗ひ口をすゝいでつゝ、ましく神域を進むとき、大地にしつかりと根を張つて高く聳える老杉の姿と、大空にひろがつたその葉の深い緑とは、神の宮居の静けさをひしくと感ぜしめるでせう。もし其の時神樂の笛

の音が聞えてきたならば、私達の心はその神々しさにうたれて、言ひ知れぬ深い感激を覚えるであります。

神宮に對しての奉賽ほうさいの道は色々開かれて居りますが、この神樂こそ最も鄭重な儀であります。明治維新までは師職が自己の邸宅に神殿を設け、參宮者の請に應じて私に神樂を奏して居りました。

所謂伊勢太々神樂は是であります。ところが明治四年に師職が廢せられ、後神宮に神樂殿が設けられました。

御神樂を供進しようとする者は、先づ神樂殿の受付係へ奉奏の趣旨、御神樂の種別等を申し出ますと、やがて到着順によつて登殿が許されます。神樂殿の内部は全く塵一つとどめぬ清淨さで、そこには杉の木の間をもれた嚴かな光が満ちて居ります。靜かに着座すると心は自ら澄み透りませう。

所役員の登殿があると、やがて祓はらが修せられます。つゝいて大麻

が奉安せられ、神饌の奠供があり、一同が平伏するうちに、祝詞が厳かに奏上せられます、終ると緋の袴の舞女数人が倭歌に應じて舞ひ始めます。神代さながらの樂の音と、優にやさしい少女の舞は、神の御心を慰め奉るにふさはしいものでありまして、人の心は現し世をはなれて神祕の中に溶け入るであります。舞樂が終ると大麻・神饌が撤せられ、供進者はそれを拜受して退下いたします。

此の淨らかに懐かしい神人合一の美はしい貴い事實は、神國日本に於いてのみある事で、恐らく永遠に傳へられる御國のてぶりであります。

當市の小學校では卒業に際して、必ず神宮に参拜し御神樂の奉奏を致すことになつて居ります。これは長い學びの道につ、がもなく、國民の大義務を完了し得たことを感謝し奉ると共に、將來社

會の一員として皇國の大理想實現のために懸命の努力を捧げることを御誓ひ致し、なほ一層の御加護を垂れ賜はらんことを御祈りするものであります。

### 一五 五十鈴川

清き流れの 五十鈴川、

御山の姿 けだかくも、

うかべていよよ すみにけり。

遠き流れの 五十鈴川、

尊き宮居 かしこくも、

うつしてとはに たえぬなり。



川 鈴 十 五

### 一六 猿田彦神

瓊々杵尊は神勅を奉じて、いよ／＼高天原をお立ちになりました。

だん／＼下界の方へ降つていらつしやいますと、天八衢といつて、道が幾筋にもわかれてゐる所においてになりました。

すると、そこに一人のあやしい男がつゝ立つて道をふさいでゐます。脊が高く、鼻が長くて二つの眼はぎら／＼とかゝやいて、上の方は高天原から下の方は豊葦原中國まで照してゐます。

瓊々杵尊もお供の神様たちも遠くからこれをご覽になつて、大それうお驚きになりました。

「あれは何者だらう。」

「眼を光らしてこちらをにらんでゐる。あやしい奴だ。」

「きつとわるい心をもつてゐるにちがひない。」

とみんなおさわぎになりました。

瓊々杵尊はおしづかに、

「お前たちのうちで誰かあの男のそばへ行つて、よく見とゞけて来い。」

とおつしやいました。

「私が行つてまゐりませう。」

と、一人の神様がおかけ出しになりました。そして、あやしい男のそばへおいでになつて、

「お前は誰だ。」

と、お尋ねになりました。しかし、其の男はたゞだまつてこちらをにらんでゐるばかりです。其の眼があまり光るのでまばゆくてたまりません。其の神様はす／＼と引きかへしていらつしやい

ました。又一人の神様がお出かけになりましたが、やはりだめです。

瓊々杵尊は大そうご心配になつて、

「どうしたらいいだらう。」

と、御相談になりました。しかし誰もよいお考がありませんのでみんなだまつてひかへていらつしやいます。

すると、一人の神様が前へお進みになつて、

「それは天鈿女命あめのつひめのみことをおつかはしになつたらよいかと思ひます。命は本とうに勇氣があつて、その面白いことをして人を笑はせるのがうまうございます。いつぞや天照大神が天岩戸におかれになつた時も面白いをどりをして、大神を岩屋の中からお出し申しました。今度もきつとあの男の本性を見とゞけて来るにちがひありません。」

と申し上げました。

それでいよく天鈿女命がお出かけになることになりました。

命はわざと滑稽な風をして、あやしい男のそばへおいでになると急に大きな聲でお笑ひになりました。その姿があまりをかしかつたので、今まで眼を光らせてゐた男も思はず眼を細くして笑ひ出しました。それでちつともまばゆくないやうになりました。命はすかさず、

「天神の御子のお通りになる道をふさいでゐるのは誰ですか。」

とお尋ねになると、その男は

「私は中國の神で猿田彦と申します。ここに立つてゐましたのは、大神の御孫が中國へ降つていらつしやると承りましたので、御案内のためにお迎へにまゐつたのでございます。」  
といひました。



これを聞かれて瓊々杵尊は大そうお喜びになり、猿田彦神を案内者として、無事日向の高千穂の峯にお降りになりました。

### 一七 倭姫宮

倉田山に鎮りいます倭姫宮には、我が國にとつて實に功績のあらせられた方、殊に當市としては忘れる事の出来ない有難い倭姫命と申す方がお祀りしてあります。

命は日本武命の御叔母に當らせられます。お若い時に天皇の仰によつて、天照大神の御杖代となられ、諸國をお巡りになつて、大神のとことはに鎮座あそばさるべき聖地をお求めになりました。それはずつと大昔、今から二千年も前のことでしたから、乗物とは何一つなく、道らしい道すら殆んどありませんでした。或る時には草深い野を横ぎられたり、道もない山を越えられたり、又



(藏館念記都神) ふ給け授に除武本日を創寶命倭

長い年月の間、方々をお巡りになられた末、とう／＼神風の伊勢

時には木の陰で夜を明された事すらもあつたでせう。殊に雨風の

激しい日や、暑さ寒さの厳しい頃などは、どんなにお困りになられたでせう。しかし

「天照大神を日本中に二つとないよい土地にお祀り申し上げ、天皇の仰を立派にお果し申したい。」

かうしたお考で居られた倭姫命は、色々な御難儀も決して苦しいともつらいとも思ひにならなかつたのです。

の國、神路山の麓に來られました。すると或る夜、命の御夢に天照大神がお現れになり、

「此處こそ我が意にかなふ處である。」

と、仰せられました。命のお喜びはどんなであつたでせう。早速この事を朝廷に申し上げられ、こゝに大宮をお造りすることになりました。

私達の遠い祖先の人々は、吾も吾もと御手傳を願ひ出て、喜び勇んで働きました。神代ながらの静かな森の中からは、宮造りにいそしむ人々の掛聲やら、槌打つ響やらが、清い五十鈴の流を越えて晴やかにもれ聞えてきたこととせう。

かうして天照大神はいつくまでも五十鈴の宮に鎮座まします事になつたのであります。

倭姫命は此の後、色々の儀式をお定めになつたり、又供物を奉る

場所をお選びになつたりして、一生皇大神宮にお仕へになりました。

天照大神をこのよい土地にお祀りせられた倭姫命、私達のふるさとを神都としておひらき下された倭姫命、この尊い有難いお方をお祀りしたお宮こそ倭姫宮なのであります。

### 一八 大若子命と乙若子命

垂仁天皇の御即位二十五年皇女倭姫命が皇大神を奉じて諸國御遷幸の御時、大若子命に大宮地探索の命があつた。そして自らも所々の御遷幸に従はれ、度會郡久具村へお向ひになつた時大若子命は御船を率ゐてお迎へ申し上げ、

「佐古久志呂宇遲の五十鈴の川上には大宮地として誠にふさはしい靈域がございます。」

と申し上げたので、倭姫命は直ぐ御船をお進めになり、大湊・二見の浦を経て五十鈴川を溯り、宇治の家田田上宮に奉遷遊された。ところがやがて其處も神慮に副ひ奉らないといふので、次に奈尾之根宮に遷幸遊された。今の内宮の正北にあたる中村の東で俗に皇女ケ森と稱せられてゐる處がそれであるといはれてゐる。時に大田命も亦五十鈴の川上に好い大宮地があることを申し上げたので、

「朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞えぬ國、風の音聞えぬ國、弓矢鞆の音聞えぬ國、大御意の鎮りいます國である。」とて大いにお悦びになり今の地に大宮地をお定めになつた。そこで大若子命はこの地を支配してゐられたので、

「我祖先天日別命に賜つた伊勢國の内磯部川以東の地を奉らう。」とて物部八十伴人を率ゐて盛に土木を起し大宮を造營せられたのである。

この時代には  
勳功第一の者  
に必ず名を賜  
つたものであ  
る

である。

又此頃北越地方に兇賊がゐて朝命を奉せず、良民をしえたげてゐた。天皇は命に標劍をお授けになつて討伐することをお命じになつた。そこで命は勅命を奉じて各地の賊を平定せられたので、大幡主命といふ名を賜つた。

朝廷ではその功勞を嘉せられて、磯部川以東の地を特に神國と稱し、命を神國造並に大神主に任ぜられた。

命の御弟を乙若子命と申す。景行・成務・仲哀の三朝に仕へ、皇大神奉遷の際、大若子命とともに大功があつた。

又武勇の譽の高いことも御兄に劣らない神で、此の度神功皇后が三韓征伐を遊されると承つて、命は進んで從軍され、皇后に鳴る鏑矢を作つて献上せられた。この矢は大きな唸をたてて遠くへまで飛び、大いに敵を惱ましたので、皇后から加夫良居命といふ名

を賜つた。

大若子命の後を繼いで大神主に任ぜられた。祭政ともに一人でこれにあたることは永く子孫にまで續いたが、天武天皇の御代その裔孫で、度會神主の祖である兄蟲が初めて豊受大神宮の禰宜に補任せられて以來、その子孫は明治維新に至るまで世襲奉仕したのである。

省線山田上り驛の東南約百米にある草奈伎神社はかの標劍を、大間國生神社はこの二功神の神靈をお祀した社である。

かくてこの二神は我が神都創建に大功ある神であるから、特に豊受大神宮の攝社の首班として式年の造替をお受けになるのである。

### 一九 勢田川

勢田の流の入船出船

わけて賑ふ御蔭年

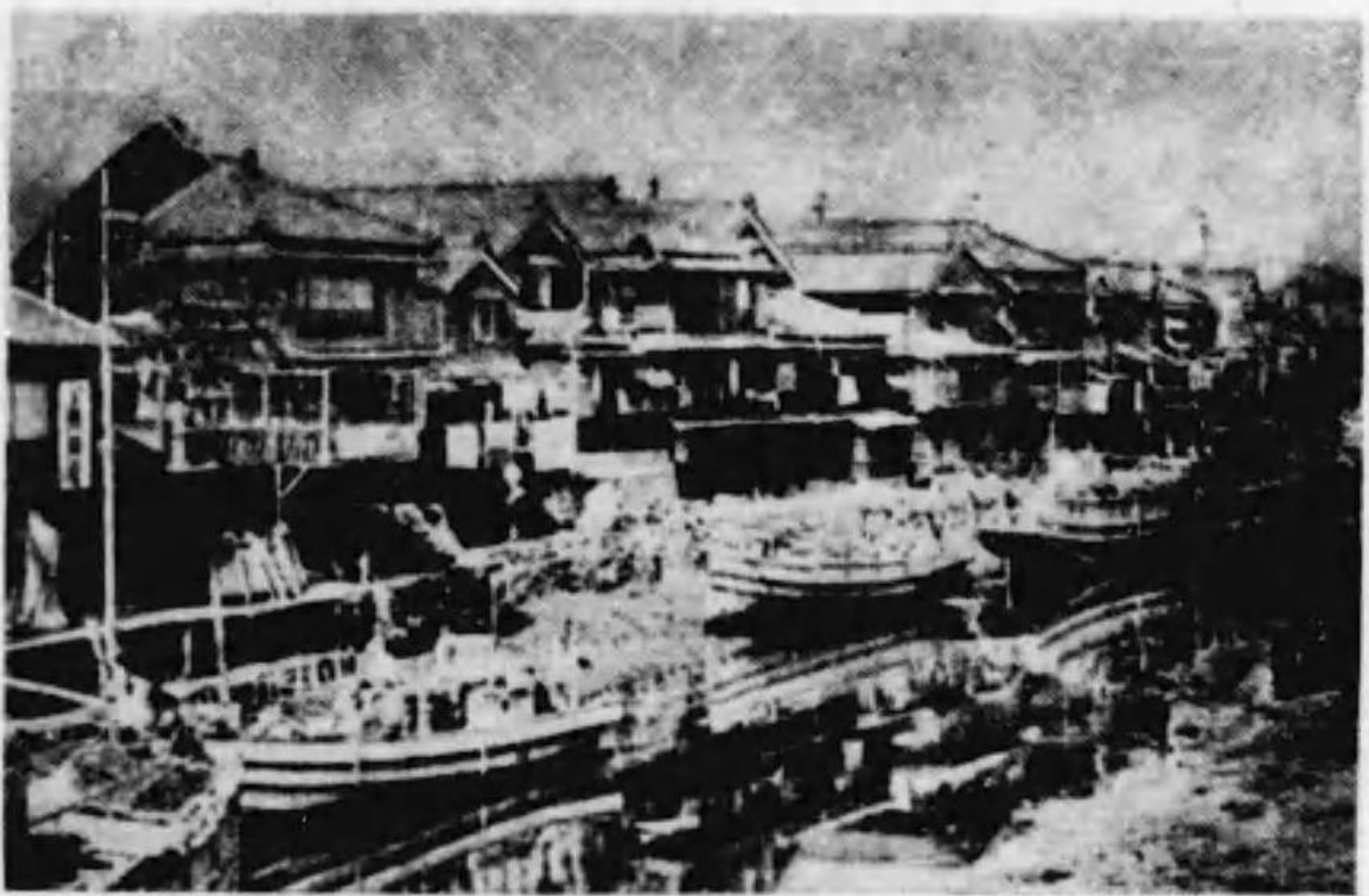
内外の宮を鎮め祀られてよりこゝに二千年、勢田の流は今も其の源を鼓ヶ岳に發し、宮崎の地を流れ、豊川の分流と清川の下流を入れ、河崎の橋々を潜り、神社・大湊に至つて五十鈴の本流や宮川の分流と合して伊勢の海に注いでゐる。

長さは僅かに十軒ほどの小流であるが、小田橋附近までは、潮の満干があり、自然の河港として河崎・船江の河岸には志摩・南島紀州・四日市・名古屋方面へ通航する大小の船舶が絶えず往來して、年額實に三百三十萬圓の物資を移出入してゐる。移入品の主なものは清酒・ビール・鮮魚・石炭・肥料・鹽・木材等で、移出品の主なものは米・麥・木炭・木材・石油・清酒・醬油・綿絲等である。

昔鐵道の便の開けなかつた頃、三河・遠江邊の參宮客は多くこの川筋によつたもので、今も陽春の候、満船飾を施した船に笛・太

鼓の音面白く繰込む参拜者のあるのは其の名残であらう。  
 明治五年五月畏くも明治天皇神宮御親謁の際は、大湊より御船でこの川をさかのぼらせられ、二軒茶屋に御上陸、外宮行在所に入御、両宮御参拜の上、再び二軒茶屋より御乗船、鳥羽に向はせられたのである。

今この川の沿岸地区に魚問屋をはじめ各種問屋軒を並べ、又紡績・織布・製氷・製材・清涼飲料水・石炭ガス等の工場多く、商工業に活気を呈してゐるのも、將來本市屈指の商工業地帯として多大の



河崎魚河岸

望をかけられてゐるのも、一にこの川の賜物である。

然るに近年この川底に土砂埋没して、船舶の出入に困難を感じたが、大正七年頃から着手した浚渫工事がほぼ完成したので、今では餘程通航に便利となつた。

聞くにさへやさしい錦の小川の名あるこの川は、たゞ運輸の便を與へるのみでなく、四季の行樂にも適する。春は丸山の森のほとりに摘み草をする長閑けさ、夏は中山寺あたりに螢狩する涼しさ、秋は二軒茶屋の岸邊に舟を浮べて鯉釣る快さ、冬は川一條を残した雪の曙の美しさ等、いづれもえもいはれぬ風情である。

### 二〇 光明寺

御幸通の錦水橋附近を通過する時、北側に何となくおくゆかしいお寺が見える。これが勤王遺蹟の光明寺である。

寺傳によると「聖武天皇の勅願により、前山村の鼓ヶ岳に建立されたが、後、山田の吹上村に移り、世變に伴ひ次第に衰へてゐたのを結城宗廣の男、月波惠觀禪師が住職となるに及んで、大いに寺運を挽回して中興開山となり、遂には敷地四千五百坪、堂塔十三舎あり、三方に堀を廻らした大伽藍となつた。」といふことである。

當時は恰も足利尊氏が伴り降り、後醍醐天皇は其の情を知り給うたけれども、深い御考があつて之をお許しになり、新田義貞・北畠親房等に内勅を下して、各須要の地に據つて復圖を命じ給うて、京都へ還幸遊ばされた頃であつた。

そこで親房は宗良親王を奉じて山田に來り、光明寺に滞られたのであるが、これは惠觀が北畠顯家を輔翼せる宗廣の俗縁であり、寺は宏大な構へて多數の軍兵を駐めるに適し、且つ山田には勤王

寛文十年(三三〇)十一月二十四日  
 上中之郷鉦屋世古より出火  
 焼失家屋五千七百四十三戸  
 死者四十九人

の神官あり、附近には勤王の豪族散在して謀をめぐらすには好適の地であつたからである。

随つて當時の古文書も多數所蔵されてゐたのであるが、中世散佚して漸く残存せるもの、中、宗廣自筆の軍中日記其の他を一綴とした「光明寺藏書殘篇一卷」及び「結城宗廣並に同夫人より惠觀に贈りたる書翰」は國寶となつてゐる。

この光明寺も寛文十年の山田大火には大半烏有に歸し、類焼を免れた本堂(天和元年再建のもの)は後、今の場所に



(寶國) 部一の篇殘書藏寺明光

移轉修築されて現存してゐる。

舊境内の西方に當る一部分は、宗廣・惠觀等の墳墓地となつて保存されてゐるが、大部分は民家建ち並び、其の面影を存してゐない。

又この寺の鐘については面白い話がある。

梵鐘は數回改鑄されてゐるが最初は天平四年勅により鑄造されたものであつて、毎日酉刻(午後六時)と子刻(午後十二時)との二回撞いて時を知らせてゐたが、天正年間、外宮の神官から「神宮の附近では鐘を撞かぬのが古法であるから撞くのを止めるやう。」との沙汰があつた。そこで寺僧等は豊臣秀吉に訴へ、その許を得て相變らず時を知らせてゐた。山田で鐘を撞くのはこの寺だけであつたから「光明寺の一つ鐘」といつて神都八勝の一に數へられてゐた。その後、此の鐘は破損したので改鑄し、更に寛文の大火にあつて

神都八勝

小田路 前田晩夜晴  
高倉田 暮雪鐘雨  
宮見川 夕照雁月  
二宮見川 落雁月  
大朝湊 秋雁月

再鑄したのが現在のものである。

此の由は額に記して鐘樓に掲げてある。

元日の旅寝や伊勢のひとつ鐘	出羽 栗の本蒼山
千鳥なく水やひとつのゆるし鐘	信濃 櫻井 蕉雨

### 二二 結城宗廣

結城宗廣は、北條高時についてゐた武士であります。後に吾々は日本國民として、天皇の御ために盡すのが本當であると考へて、それから後醍醐天皇や護良親王に仕へて、新田義貞と共に北條高時を亡した立派な大將であります。

宗廣が志を立て、京都に上り、後醍醐天皇にお目どほりを許されてこれまでの不心得をわび、「今後は天皇の御爲にお盡し致しませう。」と申し上げると、天皇も非常にお喜びになつて、ほうびとし

て領地をお下しになりました。まもなく足利尊氏が叛いた時、北畠顯家と共に大いに之を敗りましたから尊氏は九州へ逃げて行きました。ところが九州へ落ちて行つた尊氏は、大軍を引連れて都をさして攻め上つて來ました。その勢は甚だ盛で、楠木正成は湊川で討死をするし、北國へ向つた新田義貞は藤島で戦死し、奥州から急ぎ上つて來た顯家も不幸にして戦敗れ、攝津の阿部野で戦死してしまひました。そこで天皇は大いに御心配あらせられ、將士も亦非常に力をおとしました。此の時宗廣が參内して、

「宮を奥州へお下しになつて、彼の地の兵をお召しになるならば、四五十萬騎も集りませう。宗廣が宮を奉じ老の頭に冑を頂いて京都に攻め上つたならば、一年を過ぎずして會稽の恥を雪ぐことが出来ませう。」

と申し上げますと、天皇を始め奉り左右の老臣達も皆、なる程と

賛成しました。

やがて宗廣は北畠親房と共に、義良親王・宗良親王を奉じて、奥州へ下ることになりました。先づ伊勢の山田へ來ていろ／＼の用意をしました。當時山田には度會家行其他神宮の神官に勤王家多く、又光明寺には宗廣の第三子と傳へられる惠觀といふ僧がゐて、宗廣等の爲に大いに力を盡しました。

さて、いよく準備もとのひましたから、風のおだやかになるのを待つて、南朝の軍港大湊から船出することになりました。

時は延元三年九月十日、親王の御座船を中に立て、數多の兵船順風に帆をはらませて、靜かな海面をすべるが如く東へ向つて進んで行きました。ところが遠州灘を過ぎる頃、一天俄かにかき曇つて海風吹き荒れ、さつきまで靜かであつた海面は忽ち修羅場しゆらじやうと化してしまひました。

延元三年  
紀元一九九  
八年



或はかちをかき折つて風波にもてあそばれ、或は帆柱を吹き折られて大波にさらはれ、或はさかまく渦を残して海底に沈んで行くもの等、さすがの兵船もさんく／＼な目にあひ、果ては散り／＼になつてしまひました。そして親房は常陸へ、宗良親王は遠江の白濱へ、



結城宗廣肖像

皇太子義良親王と宗廣とは伊勢へ吹きもどされて來ました。これは親王が天皇の御位にお即き遊ばされるため忝くも天照大神の御示しになつた伊勢の神風であつたのであります。

宗廣はなほ奥州へ下らうと思ひ、光明寺に止つて順風を待つてゐましたが俄に病にかゝり日毎に衰弱が甚だしくなりました。そして今や息も絶え／＼になりましたから、惠觀はまくらもとによつて「一日も早く御全快なさるやうにと朝夕お祈り致してゐますが、

親朝  
宗廣の長子

今日ではとても御回復なさる見込はありません。御臨終の日も遠くはないと思はれます。どうぞ覺悟をお決めになつて、念佛を唱へ、お心安く阿彌陀様のお迎へをお待ちなさいませ。それにつけても何か言ひ残されることがありましたらおつしやつて下さい。」

と言ひますと、宗廣はばつと眼を見開いてはね起き、ふるひ聲で「自分は年己に七十に及んで、身にあまる榮譽を極めてゐるから、此の世では何も思ひ残すことはない。唯尊氏を亡ぼすことが出來ずに死んでしまふのは千萬年の後までも恨だ。親朝に傳へて呉れ。『後生を弔はうと思つたら佛事供養もしてはならない。念佛を唱へることもいらぬ。唯朝敵の首を取つて墓前にかげ並べよ。』と言ひ置いた。」と。

これを最後の言葉とし、刀を抜いて逆手に持ち齒がみをして死ん

だといふことであります。  
明治の御世になつて朝廷宗廣の勲功を賞せられ別格官幣社として祀られました。昔の光明寺跡にある墳墓に詣でる時は今も尙昔語に悲憤の涙を催します。

二三 朝熊ヶ岳

お伊勢な

お伊勢お山は 朝熊ヶ岳よ、

朝熊よい山 名も高い山、

高いお山だ 日が昇る

日が昇る。

岳のな

岳のとうふ屋 知られた旅籠、

萬金丹は お腹のくすり、  
甘いは一休の 茶の子餅

寺はな 茶の子餅。

寺は尊い 金剛證寺、  
た、おごそかな み堂の中に、  
法の御燈明 明ります

古いな 明ります。

古い寺ゆゑ 國寶もおほい、  
雨寶童子に 嘉隆畫像、  
鏡 經筒 太刀本堂、  
太刀本堂。

奥のな

奥の院へは 卒塔婆の道よ、  
晴れたよい日は はるかに富士の、



堂 本

清いすがたが をがめます  
をがめます

行こかな

行こか公園 東のお山、  
鳥羽の島々 太平洋も、  
眼路ははてなく ひらけます  
ひらけます

山へな

山へ登るも 昔とちがひ、  
東洋一の ケーブルカーよ、  
御代のめぐみは ありがたい  
ありがたい

### 二三 俳祖荒木田守武

内宮一禰宜荒木田守武は、今から凡そ四百年前の人である。幼時  
から學問を好み逍遙院内府及び宗祇・宗長などいふ學者について

勉強し、遂に連歌の奥儀を究め、又俳諧にも精しく、始めて俳諧の式を定めた程であつた。

大永の頃一夜に百首の和歌を詠み、一首毎に「世の中」といふ三字をよみ入れて子弟に授けられた。後の人これを世の中百首又は伊勢論語と稱して家庭の教訓とした。其の中の數首を示さう。

世の中の親に孝ある人はたゞ

何につけてもたのもしきかな

世の中はものの稽古をするがなる

富士のたかねに名をあげよ人

世の中に書くべきものは書かずして

事をかくなり恥をかくなり

虎にのりかたわれ舟にのれるとも

人の口はにのるな世の中

世の中の大永五年なが月の

かのえ申の夜百首よむなり

何事にも一心にならないと上達はせぬもので、守武が此のやうに歌が上手になつたのもわけがあるのである。

或る日連歌の會に赴いたが、其の途中一つの小川があつたのに、袴をかきあげずして渡らうとしたから、同伴の人々は之を見て、「袴がぬれますぞ。」といつたので驚いてかき上げた。人々は不思議に思つて「かほどの水がおわかりで御座いませぬか。」と言つたのに「連歌に赴く時は其の事のみ思ひ込むから外の物は眼に入らぬのである。」と言つたといふことである。

### 二四 麥林舎乙由

今から二百年程昔、中川乙由といふ俳諧師があつた。俗士と交るをいとひ、草庵を麥圃の間に結んでゐた、めに號を麥林舎といつた。乙由は芭蕉の門人で、伊勢の俳人仲間からは、「麥林舎乙由」「麥林舎乙由」といつて敬はれてゐた。

一日客が来て、俳諧を學ぶ方法を尋ねた。乙由笑つて曰く、

「それはなんでもないこと、眼に見たま、耳に聞いたま、口に味うたま、心に感じたま、をよんだらよいので別にむづかしい言葉をつかはなくてもよいのだ。」

と、客はしばらく考へてゐたが、

「それでは先生試に一句お願い致します。」  
と乞ふた。

折柄冬の半で、農夫が鋤を肩にして田圃に行く寒さうな姿が見える。

乙由は之を指さしながら、

百姓の鋤かたげ行く寒さかな

と、詠んだので客は成程と感心した。

同じ芭蕉の門人に、支考といふ俳人があつた。乙由は此の人と仲がよくて度々往來した。

或る日、支考が乙由の所へ遊びに來た。乙由は丁度用足しに出た後であつたから、暫らく待つことにしたが、なかく歸つて來ない。

支考は唯一人たいくつきに太い筆を取り、座敷の柱に墨の色濃く、

見龍、發句、麥林に及ばず。

麥林、附句、見龍に及ばず。

と、書いて歸つてしまつた。見龍とは支考のことである。

後、乙由支考を訪ひ、

「吾が發句は、已に君に勝つてゐる。而して附句は、尙君に勝つ

てゐる。」

と、支考曰く、

「それならば吾が發句に直ちに附句を願ふ。」

といつて、

眞黒に白紅にくるくると

と、むづかしい句を出した。乙由は其の聲に應じて、

車の牛のゆきに夕榮

尙一句を乞はれたので、

宵闇よひやみに巻く源平の旗

と、詠んだから支考は舌を卷いたといふことである。

乙由には立派な門人が大勢あつた。

朝顔あさなに釣瓶つるびんとられて貰ひ水

とんぼ釣つり今日はどこまでいつたやら

此の句を詠んだ名高い俳人加賀の千代女は乙由の門人であつた。

桐の實の吹かれ吹かれてはつしぐれ

行く年や同じ事して水車

此の句は世に知られた綿屋希因の詠んだもので、千代女と同じく

乙由の門人であつた。

此のやうに名高い門人を出したことによつても乙由は俳諧の道に

勝れてゐたことがうかゞはれる。

### 二五 俳句

元旦や神代のことと思はるゝ

荒木田守武

くもるなよ名は末代の秋の月

杉田望一

右左知れぬわらびの手先かな

杉木美津女

鍬さげて叱りに出るや桃の花

岩田涼菴

いざ櫻思ひ立つ日は曇るとも	同
いそがしや葦を摘めば土筆	岩井園女
衣がへ自ら織らぬ罪ふかし	同
浮草やけふは向ふの岸に咲く	中川乙由
この路へ迷うたもよし草の花	同
我いほは榎ばかりの落葉かな	三浦樗良
あらしふく草の中より今日の月	同
春雨や松に鶴鳴く和歌の浦	同
影もなき身をうつせとて清水かな	夜雨亭二曲
木のもとをさだむれば散る櫻かな	徳田椿堂
炭こぼしこぼしゆくなり奥の院	同
須彌壇に飛び込みにけり秋の蝶	大主耕雨

### 二六 松木満彦の恭儉

命をも身をもおしまず祈るかな

神に誠の道の一筋

とは外宮一禰宜松木満彦が詠んだ和歌である。満彦は今から凡そ三百年前に生れ、若い時から身持正しく、毎日未明冷水で身を清め、此の歌をよんでは外宮へ参拜に出るのが常であつた。年老いてからは、寒さの甚だしい日など家内の人々が若し身體に障りありはせぬかと止めることもあつたが、聞き入れずして日参したといふことである。

或時満彦が烏帽子をとつて晝寢をしてゐたら、永年飼馴した猿が主人の此の有様を見て傍の烏帽子をとつてかむらせた。これは満彦が家に居る時にも常に烏帽子をはなさなかつたから、猿が不思議

議に思つて此の様にしたのである。これでも平生行狀が正しかつたことがしのばれる。

或時河崎延貞に、

「僕がまだ下座であつた時は家貧しく不足なことが多かつたから上座の人を見ると羨ましく思つたが、

上見れば數にも足らぬ身なれども

我より下の人もこそあれ

といふ歌を思ひ出して常に心を慰めて居た。」  
と言つた。

此の様に滿彦は行狀が正しかつたのみでなく、學問を非常に好んで、神宮の貴重な神書が失はれてゐたのを残念に思ひ、大變苦心の結果全く備つたといふことである。

## 二七 神都の今昔

美しい神路山。

澄みきつた五十鈴川。

宇治橋を渡るとすぐ神苑である。

左にも右にも緑のピロウドを展べた様な芝生がある。この芝生のあちらこちらには青小松がある。見るからにすがすがしい氣が體中に満ちてくる。このあたりに、土産物屋が軒を列べてゐた昔を思ふとおそれおほい。

宇治橋から外宮前まで約五軒の御幸通は、神都で一番立派な道である。春は櫻、秋は紅葉の眺が美しい。この道は畏くも數度の行幸を御迎へ申してゐる。

この道の出来るまでは、皆舊道を通つたものである。おそれおほ



宮川とは  
兩大神宮の  
御手洗川の  
意である

くも明治五年明治天皇が二軒茶屋に御上陸遊ばされ、御馬に召し給ふて、西郷隆盛などの重臣を従へ、親しく神宮に御参拜あらせられたのもこの舊道であつたと思ふと、一木一草にいたるまで皆その當時を物語る思ひがする。

舊道には尾部坂・間の山・牛谷坂などの坂がある。この坂は昔の参宮客を大へん困らせたものであるが、藤波氏富・山田りと等の改修によつて楽になつたといふことである。更に昭和四年には、尾部坂・間の山を改修したから、自動車も自由にかけることが出来て、所々の坂路は昔の名残となつてゐる。

間の山は舊道の中程で、こゝは古の宇治・山田の境であつた。今の参宮客は大抵汽車や電車の驛々からはき出されるが、昔は皆宮川の渡を渡つたものである。

この宮川の清い水は、節面白く伊勢音頭を唄つて来た元氣な道者の姿や、馬の脊にまたがつてゆらり〜とゆられて来た三寶荒神のどかな姿をうつしたことであらう。又御蔭参りの年には、二十萬三十萬となだれこんで来る参宮客の姿もうつしたことであらう。

今山田驛前の世木坐度會氏神社の境内で行はれる勅使の川原祓は、もとこの宮川の川原で行はれた昔の名残りである。櫻の渡し・柳の渡しと、渡し名を聞く毎にその昔がしのばれて面白い。

夜山田驛前へ行くと、驛前通は昔

伊勢大神宮御  
鎮座歌  
彌長久  
世怡彌成  
安樂樂  
是者伊勢  
善所伊勢



(繪圖所名宮參勢伊) 圖の岸東川宮の昔

の姿や、馬の脊にまたがつてゆらり〜とゆられて来た三寶荒神のどかな姿をうつしたことであらう。又御蔭参りの年には、二十萬三十萬となだれこんで来る参宮客の姿もうつしたことであらう。

今山田驛前の世木坐度會氏神社の境内で行はれる勅使の川原祓は、もとこの宮川の川原で行はれた昔の名残りである。櫻の渡し・柳の渡しと、渡し名を聞く毎にその昔がしのばれて面白い。

夜山田驛前へ行くと、驛前通は昔

明星  
多氣郡明星  
村



山田驛前通

とうつてかはつて二階や三階建の旅館や食堂、土産物屋が軒を並べて、晝をあざむく様に明るいのに驚く。

又驛の出口には、一々宿の名を書いた提灯を持つて、案内人が列んで客を迎へてゐるのを見るが、昔は御師の案内人が明星までもいつて、参宮客を迎へたそうである。

御師は山田にも宇治にもあつて、何々大夫と稱して大きな構をして神樂の奉奏までもし、年々その檀

家に御祓と伊勢暦を持つて廻らしたものである。

この暦には、八十八夜・二百十日などが書き入れてあつたから、大へん重寶がられたもので、今神部署から頒布する暦の前身だといつてもよいとのことである。

この神都は、南に近く神路山・鼓ヶ岳・高倉の山々が連り、北には遠く田園が伊勢の海まで續いてゐる。西には宮川、東には五十鈴川、中央には勢田川が流れて到る所自然の美に富んでゐる。

實に神都は美しい。南の山々が緑をますにつれ紅葉を催すにつれ、北の田野が緑に黄に染められるにつれその趣を増す。殊に春神苑に、文庫に、御幸通に、宮川堤に、櫻咲く頃はいよゝ美しく、全市は花につままれて全く清明の都となる。

實に神都は聖地である。春も夏も秋も冬も参宮客の絶える間は無い。殊に、年の暮から正月にかけての参宮客は、町々に満ちて全

市は人に埋められて、全く神の都となる。

## 二八 通信交通

本市は神宮所在地の故を以て近年其の交通は甚だ便利となつた。國道は遠く東京より名古屋・津を経て宮川橋に來り、こゝより浦口町に出で筋向橋を渡り、常磐町・宮町・八日市場町・一志久保町を過ぎて宮後町に入り北御門きたみかどに出で、外宮前より御幸通を経て宇治橋に達してゐる。

御幸通は經費三十七萬五千餘圓を投じて明治四十三年竣工したもので、中央を車道となし左右に歩道を設け、歩道には櫻・楓等を交植して風致を添へてゐる。此の道路が開通してからは氏富長官の逸話の如き全く昔の夢と化してしまつた。

縣道は本市を中心として飯南郡粥見村かつかみに至る粥見線、度會郡吉津

村に至る吉津線、神社町に至る神社線、五ヶ所村に至る五ヶ所線志摩郡鳥羽町に至る鳥羽線、波切町なみきりに至る波切線等八線ある。

市道は兩宮間即ち豊川町より岡本町・尾上町・倭町を経て古市町に出で、中之町・櫻木町を過ぎて浦田町に至る外宮内宮線を始め、山田驛船江線、今社西線等大小幾多の街路縱横に通じ其の延長實に八十七軒に達してゐる。

而して是等の國縣市道は互に連絡して交通上多大の便益を與へてゐる。

本市に鐵道參宮線の開通したのは明治二十六年で、初は關西線龜山驛より津・松阪等を経て宮川驛まで通じてゐた。然るに同三十年山田驛まで延長され、更に同四十四年鳥羽驛まで延長されたので、神宮に詣で二見・鳥羽に遊ぶ者は非常に便利となつた。

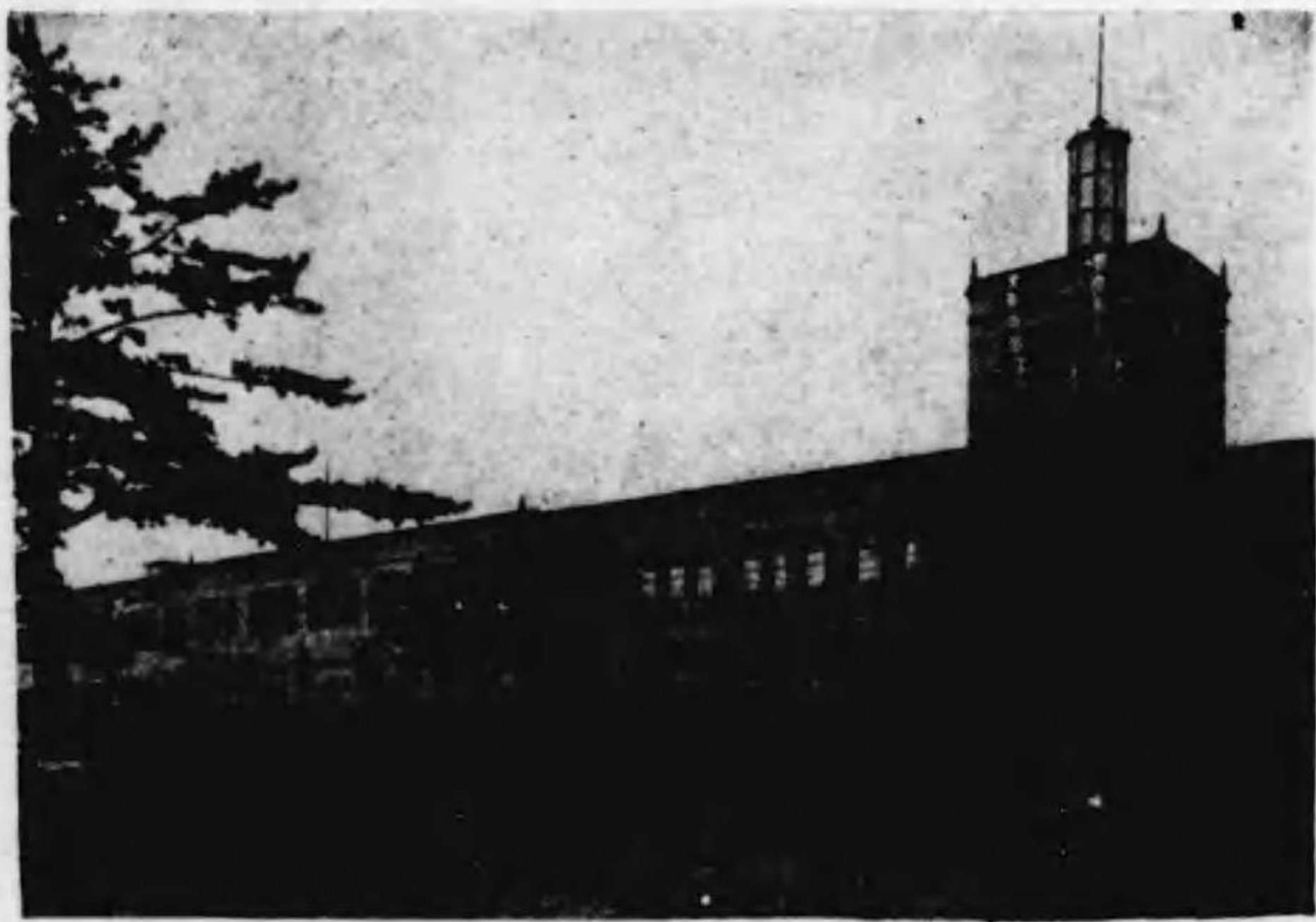
山田驛・山田上口驛の乗降客は參急電鐵・伊勢電鐵が開通した、

め激減したが、それでも兩驛合して毎年共に百萬人を超え一日平均二千七八百人の多数である。

なほ旅客の外に多くの貨物も鐵道便によつて輸送される。其の兩驛に到着する主な物は米・麥竹・砂糖・大豆粕・肥料・綿類綿糸・セメント等で、發送する主な物は木材・砂利・漬物・綿絲・綿織物等である。

本市に電車の開通したのは明治三十六年で、初は山田(岩淵)二見間を通ずるに過ぎなかつたが、

同三十九年には山田驛より宇治浦田にも通じ、其の後御幸通が開



驛田山治宇急參

通したので、大正三年から現在の如く山田驛を基点として外宮前と内宮前をつなぎ、其の間名所舊跡に寄り、又二見浦にも通じ、更に東洋一を誇る朝熊山の登山ケーブルカーとも連絡するやうになつた。今運轉してゐる車輛は三十數臺で一年間の乗客は凡そ二百數十萬人である。

これは合同電氣會社の經營する市内電車であるが、近年敬神崇祖の思想普及に伴ひ神宮參拜者が激増したため、鐵道參宮線のみでは之が輸送に困難を感じるやうになつた。そこで昭和五年參宮急行電鐵と伊勢電鐵の二線が新に開通した。

參急電鐵は山田大阪間を二時間餘で疾走し、京阪神地方は勿論中國以西との往來が頗る便利となつたので參宮客の足はいや増に繁くなり、昭和六年には其の乗降客實に六十萬人の多きに上つた。又伊勢電鐵は南勢北勢をつないで遠く岐阜縣に延び、尙近く桑名

より名古屋市への乗入も實現される筈で、之が實現の曉は山田名古屋間はいふに及ばず名古屋以東との交通も一層便利となり、乗降客も激増するであらう。昭和六年の乗降客は二十五六萬人であつた。

自動車は乗合と貸切とがある。乗合自動車は三十臺近くもあるが、神都乗合自動車の青バスによれば、兩宮參拜・市内見物をなし、又二見・鳥羽・神社・大湊及び紀勢東線の柏崎かしはらへ達するに至便である。貸切自動車は市内に凡そ百五十臺ある。料金は市内どこへでも五拾錢乃至八拾錢で運轉してゐるから從來の人力車・馬車は殆ど其の影をひそめやうとしてゐる。尙貨物自動車も三十臺程あつて内外の貨物を運搬してゐる。

又市の中央を流れる勢田川と西を限れる宮川とは、自然の交通路として各種の物資を輸送するに多大の便益を與へてゐる。

三等郵便局  
五十鈴川市  
古河古崎  
大河世古  
宮久留町

明治五年、一志久保町に山田郵便役所の設けられたのが、本市に於ける郵便局の創始で、其の後種々變遷があつた。今は外宮前にある一等局の山田郵便局に於て一般通信事務を取扱つてゐる。尙市内には三等郵便局が六ヶ所に設けられてゐるが、郵便物の集配は山田郵便局でするので、其の他の局ではたゞ爲替・貯金・保険・年金等の事務を取扱つてゐる。

市内に集配される郵便物は毎年各六十萬前後の多きに上り、電信も毎年發信・着信・中繼信を合すると二十五萬通を越えてゐる。電話交換局が設置されたのは明治四十一年で、當時加入者は僅かに百五十七名に過ぎなかつたが、昭和六年には一千三百十九名の多數となり、通話數も市内外合して一日平均二千通話の多きに達してゐる。

かくて本市は年を追ふて、通信・交通・運輸共に益々便利になつ

て行く。

### 二九 勢陽五鈴遺響

勢陽五鈴遺響は凡そ百年前に編纂された我が伊勢國の地誌であります。此の書の價値に就いては今更ら言ふまでもありませんが、その編述にあつての著者の苦心と、その完成に努力した人々の眞心とは、私達に尊い教訓を與へてくれるものがあります。

著者安岡親毅は古市町の人で、幼時から文學に親しみ、とりわけ狂歌は最も得意とするところでした。二十才の頃我が郷土の地誌に見るべきものがなく、古くから知られてゐる名勝舊蹟も、だん／＼後の人に忘れられて行くのを残念に思ひ、こゝにその編纂を決心するに至りました。

さて當時のこととして實地について調査するにしても、又廣く書籍

をあさるにしても、不便が多かつたので、その事業はなかく／＼困難でした。妻の八千女は

「夫なるもの若きころより此道をこのみ、世のいとなみのからきをもかへり見侍らで、雪ならぬともし火の元にてしるし……。」と言つて居ります。好きなればこそ種々の困難にもうち勝ち、又世の營みの辛いものにも負けず、朝は早くから夜はおそくまで仕事に熱中する事が出来たのでせう。斯うした努力が五十年も續けられ、その原稿は積んで身の丈にも等しくなつたと言ひますが、全く驚歎のほかはありません。

あゝしかし、一生を捧げつくした此の大事業の完成を見ずに、親毅は忽焉として世を去つたのでした。  
孫の親成は

「此の五鈴遺響は、祖父廿餘りより思ひたち、朝夕にこゝろ盡さ

れしとかや……。しかるに老の浪立そひて、七十餘り一つといふ年の秋身まかりぬ。我はやゝ十まり一つになりぬ。父なる元脩には四歳の秋おくれ、五歳の春母にたちわかれ、祖母の養いに日を送りけるに、夜なく祖母の物語に、我十四五歳にもあらば、この五鈴遺響人にももらさんものと、過にし父とおくれし祖父のことにみに世を送る悲しさやる方なく、神々に祈、かろうじて首尾なれり、しかはあれど我十あまり三つのほどばかり、筆も只祖父の教の端も受かねはれば、假字ちがひ又はふつ、かなる事どもおほきは誠にみなし子の學び足らざるを察し、見賜ふ人々もゆるしたまへかし。」

と同書の序文に記してゐます。

はやく両親を失つて孤兒なごとなつた親成が十三歳の幼い身で年とつた祖母の涙に勵まされながら、祖父の遺業を完成しようと懸命の

努力をつゞけて居る姿を思ひ浮べてごらんなさい。

八千女の心情と親成の意氣とに感じて奮起したのは親毅の門人達でした。同書の凡例の一節に、

「此の本は栗の屋老大人の遺稿なれども、此の度世に弘うせんと欲する老幼の人々の貞孝を好し、寸勞を助けんとて増井惟休・中西正稻、其餘同志の輩再三校正を加へたり……。』」とあります。

勢陽五鈴遺響八十卷の編述は、かく人々の血と汗と涙が結晶して完成されたのです。

伊勢の海にふかくもしづむかたし貝

人に見るめにうかびこそすれ

の一首は同書が世に出るにあたつて、八千女の唇をもれた喜びの聲でした。

## 三〇 神宮御用紙

「神宮御用紙製作場」と大文字に刻まれた御影石の標柱がぬつと立つてゐる。その門をくゞつてしばらく行くと工場の入口に出る。入口の左右には榊が一本づゝ植ゑてあつて、如何にも神宮御用紙製作場らしい。

工場は代赭色の壁に總ガラス窓といふ近代的建築で、H形に建つてゐるのが美しい。工場の中は實に明るい。天井は高く一部はアルテツクスの白張、一部はガラスの二重張りで、暖か味のある柔かい光線がこゝから場内に流れ込んで来る。まんべんに流れ込んだ光は、すみとくまでもきれいに照して氣持がよい。まるでおとぎばなしの世界にでも來たやうな伸んびりさを感じる。

中央の兩側には四つづゝのかまどがある。その眞中には叩解機が

二臺と配合機が一臺動いてゐる。叩解機で細かくきれいにくだかれた原料は更に配合機にかゝる。こゝで配合せられたものは水槽に入れられる。原料は益々美しくなる。水槽は數へきれないほどあつて、内側がガラス張りにしてあるものもある。これ等の水槽は皆自由自在に水が出て、原料をいつでも洗ふことが出来るやうにしてある。

兩側では白衣に萌黄色の袴をつけた人達が紙をすいてゐる。すいた紙は一枚づゝ行儀よく積まれてゆく。積まれた紙は眞白なので目がさめる程美しい。よく見ると神宮といふ文字がすきこんである。見てゐるのもなんだか勿體ない氣がする。

この工場に働いてゐる人達は、出勤すると、すぐ点呼を受けて潔齋場で體を清める。清めた人は清められてある着物と袴にかへて修祓所に集る。そして更に神宮を遙拜して身も心も清めて、各自の



仕事に取りかゝるのだといふことである。この修祓所は工場の北側中央の「明治天皇行在所遺跡」の標柱のそばにある。こゝは御用紙をすき始めるとき、御用紙製作に關係する人々や器具機械が祓を受ける所である。

西へしばらく行くと乾燥場がある。乾燥場の入口の所に明治天皇御料「龍の井」がある。この工場は御師龍太夫の屋敷跡なので、一本一草に至るまで歴史を語る思ひがする。

乾燥場には乾燥機が四臺あつて、張り手の人達がせつせとはいでは張り張つてははいで、乾いた紙を一枚づつ、つんでゆく。張つた紙はすぐ乾くので目が廻るやうな忙しきである。

積まれた紙は裁斷所へ運ばれて、一定の形に裁斷して愈々神宮に納められる。

この御用紙の原料は楮・三極みつまた・バルブ・藁などで、これ等は工場

の南の美しい四つの倉庫に入れてある。楮・三極が長さ二米もあるかと思ふ大きな束にして、一ばい積まれてあるのは美しい。バルブは樺太から、楮・三極は土佐から來るのだといふことである。

倉庫の入口に注連繩しめなわがはつてあるので、他の工場で見ることの出來ない森嚴さがある。

御用紙は初め岐阜や土佐のものが、御師の手を経て納めてゐたが、御師が廢せられてからは直接岐阜や土佐から納められてゐたさうである。

當地でこれを製作し出したのは、御師が廢せられた時で、有志の人々が、是非この地でも御用紙を謹製したいものだといつて、松木に御用紙製作場を建てて、四五十人の職人を置き、或は岐阜より師匠を招き、或は人を岐阜につかはして、一生懸命にその製作を研究させたものだといふ。然しこの製作場も惜しい事には、數

年の後経済上の問題で解散してしまつた。  
 その後殖産組や伊勢産紙や五十鈴製紙が出来て、納めてゐたが、  
 明治三十二年三つの會社が合同して、神都製紙會社をたてて今日  
 に至つたのである。  
 場内を一巡して、「この工場で御用紙を謹製するのは普通二月か  
 ら十月までである。」といふ話を聞いてゐると夕日がさして來た。  
 夕日は工場を紅に彩つて美しい光を四方にたゞよはしてゐる。

### 三一 名物名産

#### 一 赤 福

裏は五十鈴川。  
 こゝは赤福の本舗。  
 店頭たんちゆうの朱塗のかまどには、大きな茶釜が湯氣をふいてゐる。白い

エプロンをかけた若い女が忙しきうに立廻つてゐて、如何にも昔  
 のお伊勢様の掛茶屋らしい光景を止めてなつかしい。  
 腰掛けて赤福を食べてゐる奥の客も澤山見受けられる。

#### 二 糸印せんべい

この製造の思ひつきは糸印からである。  
 神宮大宮司冷泉爲紀伯が支那より輸入の綿絲に附した商標に雅味  
 を認めて用ひさせたものである。  
 形を優雅に、風味を淡白に然もながもちするといふいろくの特  
 質をもたせたものである。  
 原料は鶏卵と小麦粉とある藥品とであるが、其の配合には大へん  
 苦心をしたものだといふことである。

#### 三 きささらぎ

或菓子屋の主人が、奇人奥山桃雲に

「餅製のもの、もう一度あれやこれやさし加へてついで見たら、何か面白いものが出来ませう。」

と教へられ、先に失敗したものを利用して作ったのが、このきさきさの始めだといふことである。

きさきさの名も、桃雲が

「一つきして失敗し、二つきして成功したのだからきさきさ。」といつて、二月の語によつて命名したのだといふ。

#### 四 生姜糖

いろくゝの形がある。いろくゝの色がある。

劔先形・熨斗形・勾玉形などは、其の形に最も苦心したものであらう。

土産物屋の店頭にはいつもならべられ、賣上高も年々増して、當地の名物として参宮客の手にさげられる様になつた。

#### 五 太閤餅

子供の初参りの御土産には、きつと太閤餅といふことになつてゐる。これは太閤秀吉がこの餅を賞美したから、これにあやからしめやうといふ親心からであらう。

「この頃は世の中が文明になつたから、太閤餅までも白餡かんになつた我々はやつぱり黒餡の方がなつかしい。」などと、いつて笑つてゐる人もある。

#### 六 萬金丹

舟遊び月まんまると萬金丹

のぼすにもよし下すにもよしと蜀山人がうたつてゐる。

今も尙一つの靈藥として重寶がられ、参宮客の土産物にもなつてゐる。

蜀山人  
江戸の人  
文政の凡人  
百年の狂歌師  
代

七 春慶塗

よほど昔、神宮の工匠が御用材のはしの拂下げで、内職に白木の箱物を作り出したことがある。

この箱物は値も安いし丈夫なので、だんく愛用せられるやうになつたが白木作なので汚れ易い。それで漆をかけようとしたがこの立派な檜材をまるきりかくしてしまふのも惜しい、なんとかよい工夫はあるまいかと考へついたので、神都の春慶塗の始だといふことである。

この春慶塗も今は鉋目までもあらはしたり、朱漆・黒漆をつかつていろく風雅なものまでも作り出してゐる。

八 山田傘

「丈夫なのは山田傘。」  
「美しいのは岐阜傘。」

と、世間の人達はいつてゐるが、山田傘にも美しいのもあれば安いものもある。これが山田傘かと驚くほど、いろくものが澤山つくり出される。

然し本當の山田傘といへば、紙は正漉、糊はわらび、油は荏、竹は秋切で、其の原料も一々しらべて仕事を確實にしたものである。

九 刳物細工

若い人が、奥の方で何か刳つてゐる。のみをあてることにちやあくといふ。削屑がくるく廻つて落ちる。子供等は、時のたつのも知らず一生懸命にながめてゐる。見てゐる中に盆や玩具が刳られていく。

この刳物が、神都の土産物となつたのは、明治初年のことである。信州のある刳物師が當地に來たのを幸、久田長七といふ人がこれを習つて櫛・椿などで、木盆・腰さげ・根つけ・こまなどを製作し

て賣り出してからである。  
今は盆・茶托ちやたく・筆立・玩具などいろいろのものが刳られて、參宮道者の眼をひいてゐる。

一〇 榊 箸

或老人が榊・杉・南天などで箸を削つて、店頭にならべて賣つたところ、榊箸が非常によく賣れたので、盛に製造するやうになつた。これが榊箸の始めである。  
榊や御山杉でつくられた箸が、五ぜん十ぜんと行儀よくならんでゐるのは美しい。

一一 煙草入

蜀山人が

夕立や伊勢の稲木の煙草入

ふるなる光る強いかみなり。

と、よんだ煙草入の店は、今はかぞへられる程になつたが、昔は街道筋に軒をなべてゐたものである。

古來神宮に於ては、革製かぜいのものは携帯することをゆるされなかつた。そこで、二百年程前池部清兵衛が苦心に苦心を重ねて紙煙草入を創製したのである。

その後、いろいろ改良を加へて巻煙草入かまき・靴かば・名刺入・敷物・爪掛等が製作されてゐる。

三〇 國學者宇治久老

今から百年ばかり前に本居宣長と同じく賀茂眞淵かまのみづの門人となつて國學の研究をした人に宇治久老うじくわうらうといふ人があつた。

此の頃漢學を熱心に研究した者の中には、支那を尊敬し日本を輕んずる輩があつた。そこで是を憤慨して國史・國文を研究し我が

國體を明かにした學者があつた。久老も其の一人である。久老は外宮の祠官橋村正身まさのぶの子で、宇治久世ひさよの嗣となつて内宮權禰にめ宜となり正四位下に叙せられた。久老は父正身が國學の研究者であつたから、其の感化を受けて子供の時から熱心に我が國の古典を研究してゐたが、後眞淵の門人となり遂に國學の大家となつた。生れつき至つて心が大きく、物事に頓着せぬたちであつた。或る時人に誇つていふには、「世間の古典や古語を研究するものを見るに、皆机の上に本を山の様に積み、わき眼もふらず一心になつて之を解決しようとしてゐるが、こんなことで眞の學問が出来やうか。自分の學問は之と違つて世間といふものを味つてゐる間に世の學者のまだ知らない事を考へ出す。これが眞の生きた學問で、世人の學問は多くは死學問だ。」と常に四方を漫遊したり、又生徒を集めて古典を教へたりしてゐた。

が、諸國から集つて來て學ぶ者が頗る多かつた。

其の説は猥みだりに古人の説のみによらず、國學者として一家をなしてゐた。著書には日本紀歌解・萬葉集概の落葉等がある。

### 三三 神宮の御祭典

神宮で行はれてゐる御祭典は、式年遷宮祭・恒例祭・臨時祭の三つに大別することが出来ます。

式年遷宮祭は申すまでもなく、皇大神の御鎮りになつてゐる御本殿を、新しくお造替へ申し上げて、御神體を新宮に遷し奉るに於いて行はれる御祭典であります。

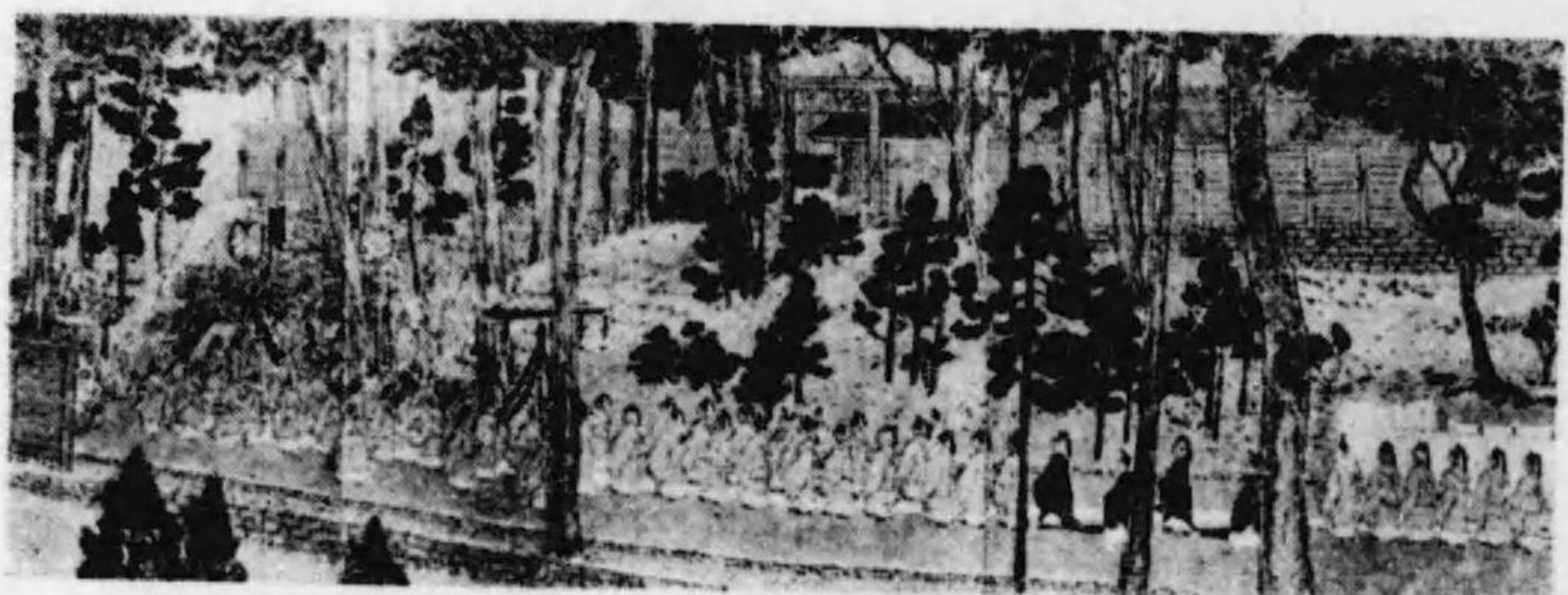
この祭典は、國民の神宮崇拜の至誠の結晶で、昭和四年十月行はれた式年遷宮祭は第五十八回目で、全國津々浦々にいたるまで、國民皆奉祝奉慶申し上げました。



宮 神 大 皇

恒例祭は、神宮に於て毎年恒例として行はれる御祭典を申します。恒例祭として特に日を定めて行はれるお祭は、神嘗祭・祈年祭・月次祭・神御衣祭・歳旦祭・元始祭・紀元節祭・風日祈祭・天長節祭・明治節祭の十一祭典があり、毎日行はれる祭典に日別朝夕大御饌祭があります。

これらの祭典には、新穀を奉つて神徳に報謝する祭、大御食大御酒即ち神様の御食事を献るお祭、或は皇大神の神御衣を献るお祭、或は年穀の豊饒を祈るため蓑と笠を献るお祭、國家の目出



卷 繪 宮 遷

度い佳節に當つて大御饌を供進するお祭があります。

その中神嘗祭は、神宮の大祭であるばかりでなく皇室の大祭で、天皇陛下には宮中賢所の大前に於て、御親ら皇祖皇大神を御祀りあそばされますと共に、神宮を御遙拜になります。

臨時祭は、年中恒例として行はれる御祭の外に行はれるお祭を申します。昔から皇室・神宮又は國家に重大事のある場合には、かならず臨時に勅使を御派遣になり、幣帛又は神寶を奉り、事の由を御報告になり、或は神助を仰ぎ

或は神恩に奉賽遊ばされます。

明治以後には、明治元年王政復古、同二十二年皇室典範及び帝國憲法制定、同二十七八年の日清戦役の宣戦並に平和克復後、同三十七八年の日露戦役の宣戦並に平和克復後、同四十三年韓國併合、大正十二年震災復興の御報告、又最近には昭和三年の即位禮及大嘗祭期日の御報告、同大嘗祭奉幣祭等の臨時祭がそれにあたります。

以上の神宮の御祭典は、大祭・中祭・小祭と三つに等級をつけて規定されてあります。

この祭典は、皆皇大神の御神格に合一しまつらうと、淨き心明き心をもつて奉仕し、常に廣大な御神徳に報謝し、寶祚の無窮を祝ひ、皇運の隆盛と國民の幸福とを祈り奉る次第であります。

### 三四 御田植

皇大神宮の諸祭典や、日別朝夕の御饌の御料米は、御田で生産されたものを用ひられる。是は御鎮座當時からの習であつて、古く倭姫命世記に、

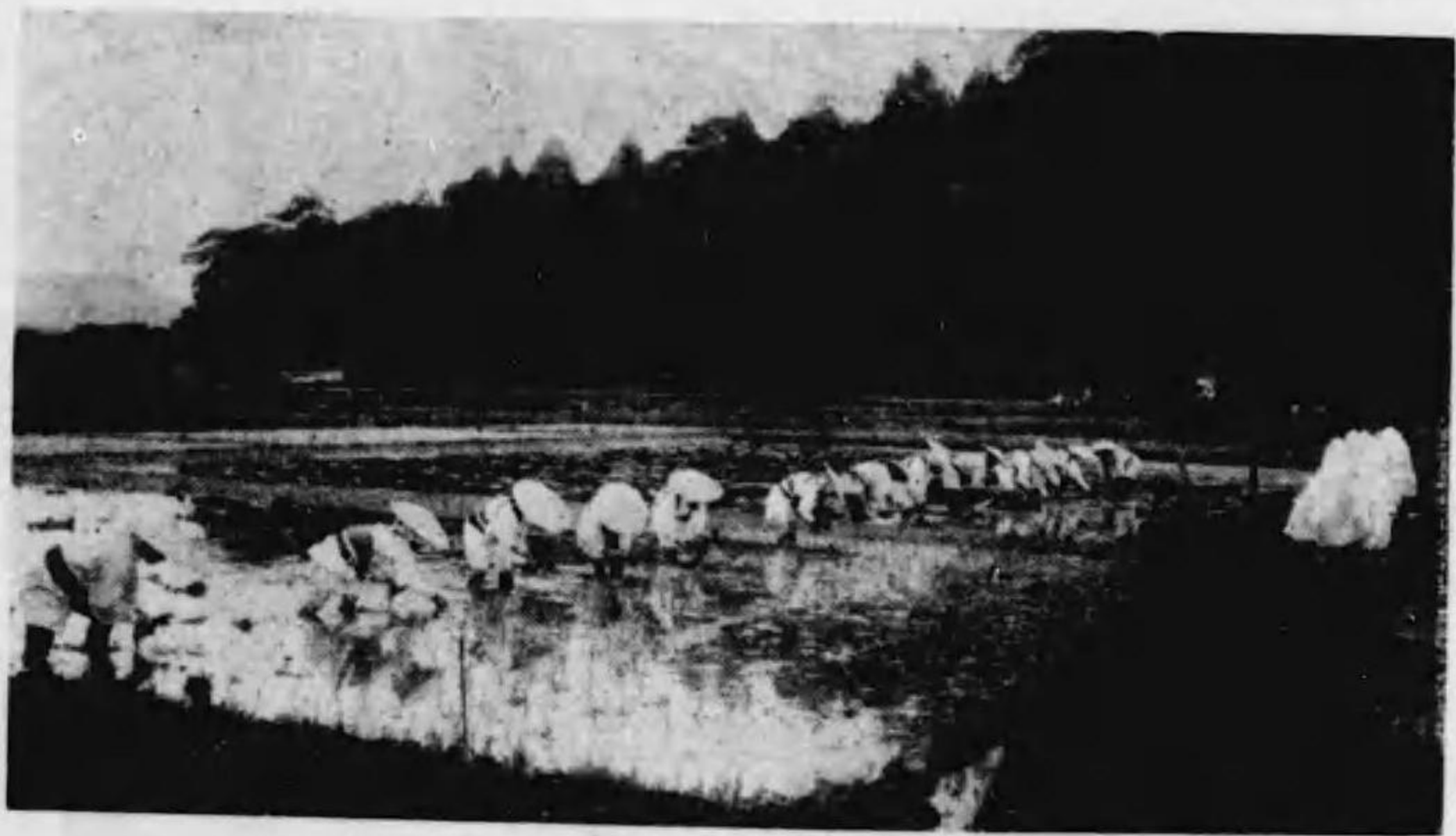
「大幡主命皇大神の朝の御饌、夕の御饌の御田定め奉る。其の田は宇遅の家田田上に在りて拔穂田と名く。」  
と見えてゐる。

宇遅の家田田上とは、今の四郷村大字楠部の地であつて、現に朝熊行電車の五十鈴川停留所から東南を指した邊を家田と呼び、其處に廣々とした神宮御料田がある。この神田で毎年五月中の吉日に御田植の神事が行はれるのである。

其の日定刻になると、奉仕者一同は蛭子・大黒の大團扇二本を先



大土御祖神社  
皇大神宮攝社



植田御の時靈宮

頭に立て、大土御祖神社おほつちのみおやに集る。こゝで厳かな修祓式が行はれる。終ると作長が恭しく早苗を捧持して、一同と共に静々と御田に参進する。行列の途上は拜觀者の人垣だ。折から打揚げる煙火は五月の空に晴やかな響をつたへ、奇麗に耕された御田はあざやかに朝熊連山の影をうつしてゐる。一同が到着すると作長は直ちに早苗を御田に投げ入れる。愈々御田植が始まるのである。向側の田の畔に立つた樂手の奏でる素朴な音

律、笛の音、大鼓の響、さては鼓や箆子の音。ゆかしい調が田の面田の面へと流れる。植手はその樂の音にさそはれて手早く植ゑてゆく。

すつかり植ゑつくされると、大團扇を持った男二人はその田に入つてぐる／＼廻る。此の稻に風も障るな、虫もつくなと祈るのであらう。次に田の畔では植ゑ終つたのを祝ふ踊が行はれる。

一同がさきの大土御祖神社へ引上げる時には、拜觀者も先を争つてその境内につめかける。間もなく簡素な囃につれて豊年踊がはじまるのだ。先づ一人の舞夫が舟を漕ぐ所作をする。これは刈つた稻を舟に積んで運ぶ意味だとのこと。第二の男は鼓を持つて進み出る。場の中央に鼓を置くと、其の上を扇で三度打つ、これは藁を打つて軟くする意味である。次に繩なひの所作をなし、鼓の男がその繩で鼓を結へる眞似をする。是で俵は結へられたので

ある。此の二人が代る代る鼓の俵を重さうに擔いで倉に納める仕事をするのであるが、其の時他の一人が身振手振面白く、擔ぐ男を窺き込み窺き込みしながら場を廻る。是が二度繰り返されるが、其の間囃手は一齊に

「ハエーヤハエ、ハエーヤハエ。」

と連呼する。「ハエーヤハエ」は「生えよ榮えよ」の意であらう。瑞穂の國の民草は「生えよ榮えよ。」と古來祈りつゞけて來たのである。

踊が終ると笛手は神前に進み出て、終の笛を高らかに鳴らし、蛭子大黒の團扇破りを最後の行事として御田植の神事は終るのである。

以上は内宮の御田植として楠部で行はれるものゝ有様であるが、尙豊宮崎にある外宮御料田、及び志摩郡磯部村にある伊雜宮御料

田でも、それ〴〵古式に則つた御田植の神事が毎年行はれて居る。

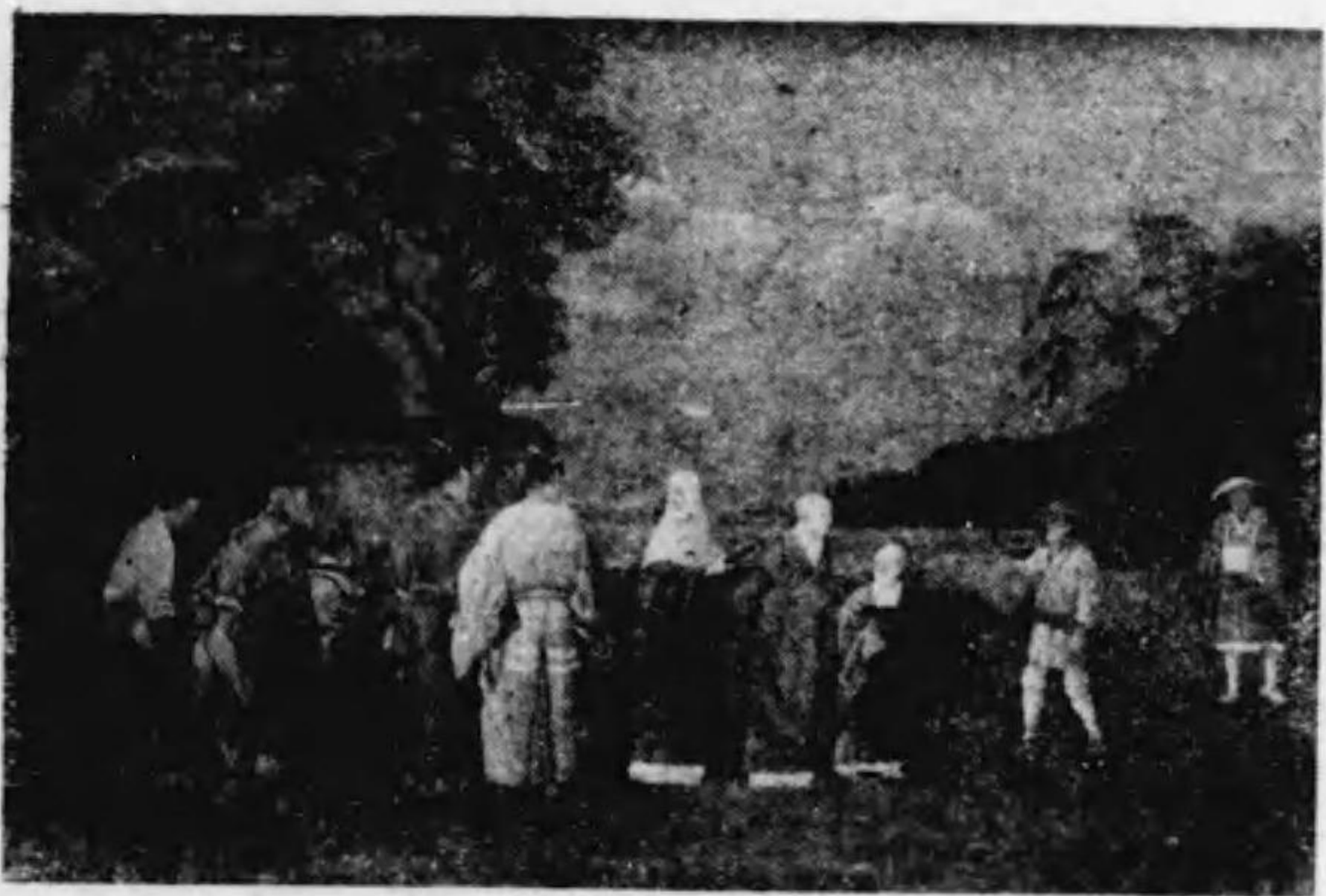
### 三五 慶光院

一寺院にして、公武の尊信をあつめ、此の神境に特別の地位を以てゐたのは慶光院である。

慶光院の創始は詳かでない。明應・永正の頃に守悦上人があつた。尼僧であつたが、その頃神宮の衰頹甚しく、宇治大橋流失して參宮者の支障は思ひの外ひどかつたが、架橋の資さへもないのを大いになげき、四方に勸進して架橋を成就し、供養を營んで慶光院神忠最初の歴史をつくり、上下の信賴を一身に集めた。

第二世智珪上人を経て、第三世清順上人は折からの亂世に朝廷の式微その極に達し、式年遷宮の行はれざること百數十年、殿舎朽ち宮門も倒れ内陣は畏くも雨露の侵すところとなり、冒瀆陵夷殆

んど言語に絶した。



清順上人勸進の圖

正遷宮も再興せんと勸めたが、果さず遷化してしまつたのは實に

清順はこれを拜するに堪へず、諸國に勸進して、天正十八年先づ宇治大橋を造替へ、法華經一萬部の供養をして叡感に入り、慶光院號の勅允を賜はる。つゞいて外宮の正遷宮を志し、諸國に勸化すること十一年、尼僧の身を以てしては神慮の恐れもありといつて、足代弘興の名で正遷宮を見るに至つた。その功は實に千歳に没せしむることは出来ない。引續き内宮の

惜しい事であつた。

第四世周養上人も、敬神の念厚く、清順の志をつぎ勸進頗るつとめ、天正十二年内宮正遷宮外宮正遷宮の儀を興した。

正親町天皇は、綸旨及び扁額を賜つてその功を賞し給ひ、後朝廷よりはしばし國家安全寶祚無窮の祈禱を命ぜられた。

第五世周清上人も亦、秀忠將軍の朱印狀を得て、兩宮の正遷宮の事に鞅掌した。天性徳高く公武の間に重ぜられ、伊勢上人・遷宮上人などと稱せられて、善光寺の大本願と熱田の誓願寺とを併せて、日本三上人とさへとなへられるに至つた。

此の如き歴史を有する慶光院も、明治二年第十五世にいたつて寺號を廢してしまつた。今御木曳に際して、特に磯村の手で慶光院曳の行はるゝは、同院の榮譽の名残ともいふべきものであらうか。明治三十八年、明治天皇兩宮に御親謁あらせらるゝや、畏くも慶

光院歴代の神忠を追賞せられ、特旨を以て守悦に正四位、清順に從三位、周養に正四位を贈られ、更に慶光院に對して、「家門の榮譽を長く傳ふべし。」と、金五千圓を下賜せられ、一門その叡慮のかしこさに感泣した。

### 三六 出口 延佳

元和元年二  
紀元二二  
七五年  
後西院天皇

延佳は元和元年岩淵町に生る。初め延良といひしが時の帝の御諱を憚りて延佳と改む。世々外宮權禰宜たり。當時神宮は戰國爭亂の餘弊を承けて、神田・領邑は武家に横領せられ、加ふるに内宮・外宮の神官常に軋轢して祭儀・典禮曠廢し、寶器・祕籍悉く散佚せり。外宮祠官の無比の寶典として尊重したる倭姫命世記すら尙之を求むるに由なく、傳來の古法・故實の徴すべきものなし、されば當時に於て學術を攻究せんとする者は、

先づ其の讀むべきものを得るに多大の勞苦を拂はざるべからざる有様なりき。

延佳之を慨歎し、奮然として神道・皇學の復興に志し、古典を涉獵し、或は所縁を求めて諸家の珍藏を探り、諸國の祕庫を尋ね、備さに辛酸を嘗めて多數の神典・舊記を蒐集し、斷簡・零墨を求めて舊典の殘缺を補綴し、或は神書を述作して外宮の祕庫稍整ふに至れり。

又、文庫を建て、祠官子弟等講學の費舎に充てんことを企て、與村弘正等と謀り、祭主大中臣定長、大宮司河邊精長等同志數十人を得て、地を豊宮崎の高神山麓に相し、沼田を埋修して工を起し、慶安元年十二月遂に文庫竣成す。大學頭林道春、豊宮崎文庫記を作りて之を賞揚せり。幕府其の功を賞し、采地二十石を附し、又文庫式條を定む。諸侯學者亦祕書珍籍を寄贈するもの多く書庫充

豊宮崎文庫  
明治四十四  
年書籍は神  
宮に獻納し  
什器は農業  
館に陳列せ  
り  
大正十二年  
書庫を史蹟  
に指定さる

後光明天皇

満するに至る。乃ち博學の士を選びて講師に擧げ、日を定めて開講す。後年、室鳩巢・貝原益軒・大鹽平八郎・藤森大雅等の碩儒來りて諸生に教授せしことあり。かくて宮崎文庫の名遠近に聞ゆ。慶安三年、延佳陽復記二卷を著す。右大臣菊亭經季之を天覽に供して叡感あり。延佳の名遂に雲上に達せり。

當時、神宮攝末社の中には神宮の御衰廢と共に廢絶して其の所在すら不詳となりしものあり。豊宮崎なる田上大水神社は度會四門の祖を祀り、外宮の攝社なるが、亦廢絶して古址不明なりしを、延佳之れが再興を志し、舊記を考覈し、方位を正して、今の宮本村藤里なることを考定し、古法に則り社祠を造營せり。其の鳥居を立つるに當り、地を掘りしに、舊鳥居の礎石を得しかば世人其の考證の的確なるに驚けりと云ふ。

承應三年延佳の功を思召されて位一級を進められんとす。時に延

佳は父延伊と同じく從五位上なりしが、其の父に超ゆるの故を以て拜辭す。朝廷乃ち其の孝心を賞し給ひ、延伊を正五位下に叙せらる。

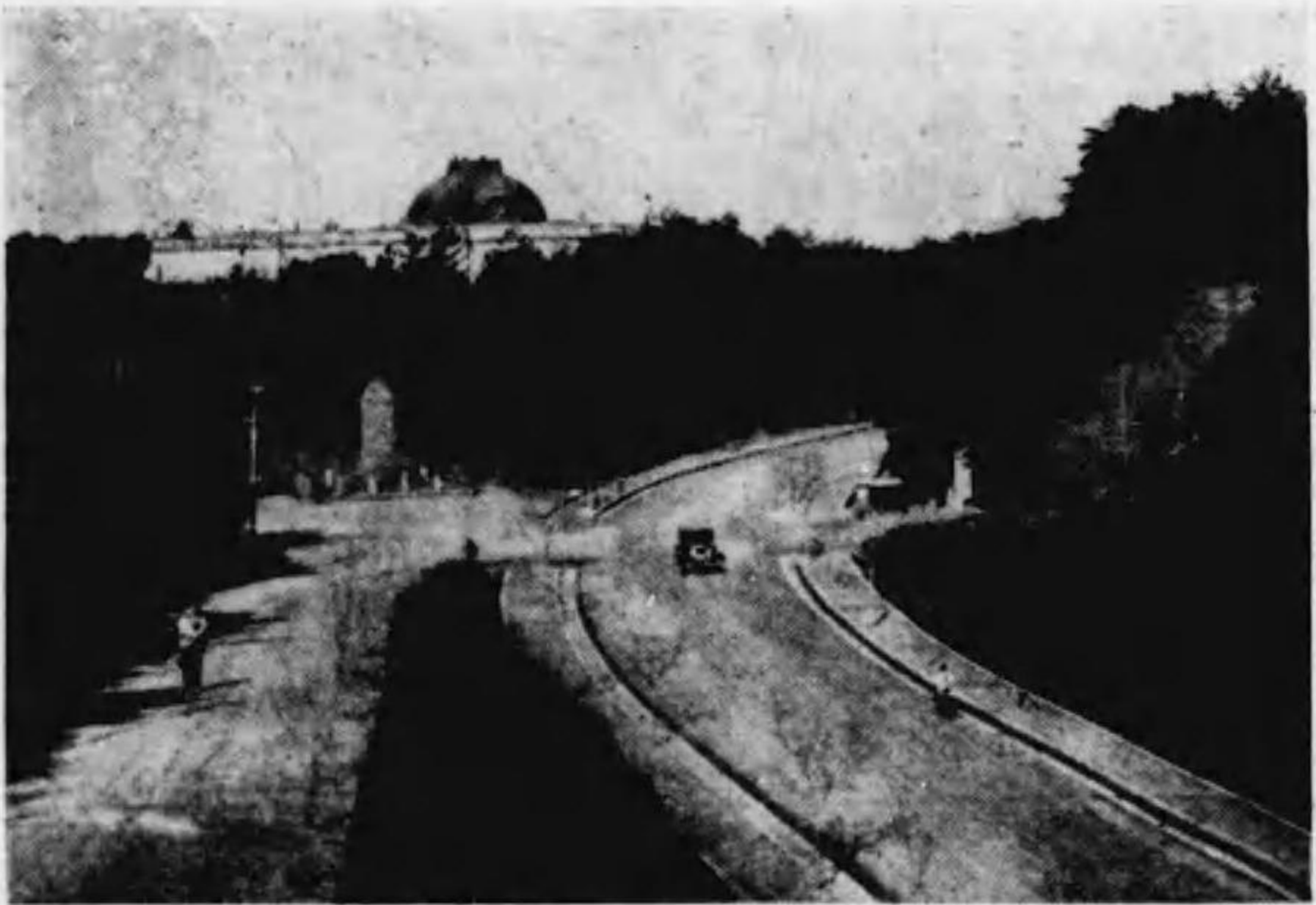
延佳其の後累進して正四位下となり、元祿三年七十六歳にて歿せり。

### 三七 倉田山

倉田山は神都唯一の靜寂平和な一大公園地である。

東の空が明け渡ると、ねぐらを出た鶯は朗かな聲であたりの靜かな空氣をうちふるはし、薄い霞の被衣をまとつた公園一帯は清らかな境地として現出する。満開の櫻花は松杉の緑に映えて美しく、柔かな芝生を舞臺として胡蝶が舞ひ出れば、小鳥は梢に枝に高く低く伴奏する。歩を移して首を廻せば、四郷の田園ひらけて遠く

連なり、黄なる菜の花、緑の麥畑、空には聲高くさへづる雲雀の



御幸より徴古館を望む

た日の倉田山の眺めも亦一段の趣がある。殊に夕陽が西の山の端

羽ばたき繁き姿も一瞬の中に眺め得られる。さつきの花が散つて三伏の夏が来れば、この附近は夕涼の佳境である。秋は姿やさしい萩の花が咲きこぼれる。木の間の紅葉が千入ちしほに染つて、倭姫宮の森から磨かれたやうな月が出る頃となれば、友呼ぶ鹿の聲が淋しく園内を流れる。文人雅客は鹿の鳴く音に誘はれて杖を此の地に曳く。雪の晴れた

に落ちて空が黄金色に輝き、忽ちにして眞紅となり、又紫を交へて變化極りない大空と相映じて雪を頂いた朝熊岳が清く浮き出された夕暮の絶景は、實に此の丘で恣にすることが出来るのである。園中には、畏くも倭姫宮を始めとして、神宮徴古館・農業館・神宮皇學館・神宮文庫等がある。神宮徴古館は神宮の寶物及び、昭和四年度の正遷宮に於ける徹下御物を始め、我が國文化の變遷を徴すべき資料を陳列した歴史的博物館である。敬虔の念と謹嚴の態度を以て神宮參拜を終へた諸國からの參宮客は、多く此の兩館を觀覽するが故に、春季の如きは日々其の數幾千の多きに達する。倉田山は實に樹々の緑したるばかりに美しく、小鳥の聲々朗かに木の間を縫ひ、春夏秋冬佳ならざるはない樂園であり聖地である。

三日月 僊

「寂照寺も荒れたなあ、あんなに本堂の瓦まで落ちかゝつてゐるよ。」

「成る程、荒れ寺の住職が乞食月僊とはよく出来てゐる。」

「全くだ。何せ、繪はうまいものだが、金高によりけり描くようではなあ、乞食と言はれても致し方あるまい。」

中之地藏町、寂照寺の門前を、さうした噂をしながら通る人々があつた。それは今から百五十年ばかり前のことである。しかし、其の後、月僊を乞食と嘲つた人達の恥ぢ入る日の來ようとは誰も豫期しなかつたことであらう。

月僊は名古屋に生れ、七歳で佛門に入つた。生れつき繪が好きで、少しの暇でもあると繪筆にばかり親しんで居るので、その師は「修

中之地藏町  
今の中之町



月 僊 筆 蹟

道の妨げになるから。」と言つて幾度も禁じたがどうしても止めない。師もその熱心に感じて遂に黙許するに至つたといふ。

十三四歳の頃江戸に出て増上寺にゐたが、後京都に上り、智恩院で修業を積み、傍ら丹青の道にもいそしんで居た。有名な圓山應舉に師事してゐたと言はれるのも其の頃の事である。かくして月僊は高僧智識となつたばかりでなく、一方繪畫にも秀でて非凡の技を發揮した。しかも其の繪は單に應舉の

風を摸したものでなく、一種獨特の氣品があり世に月僊風と呼ばれて廣く知られるに至つた。

さて寂照寺は知恩院の末寺で由緒ある寺院であつたが、當時無住となり、堂宇は荒れ果て、門墻は崩れ、本尊さへ風雨に曝される有様であつた。知恩院貫主は之を慨き、月僊の才能を見込んで住職に任じ復興の大事業を托した。かうした難儀を背負つた月僊は三十四歳の時はじめて當地の人となつたのである。

月凍る冬の夜であつた。月僊は唯一人本堂に端坐して、彼の行くべき道、なすべき事に思をこらし、佛の冥助を祈つて居た。つめたい風は隙間を洩れてかすかに燈明を明滅させ、深くなり勝る靜寂は魂を幽玄に導いて行く。彼は微動だもしない。さうして夜はたゞ更けて行つた。

やがて曉近くなると、月僊の心靈にも白光が満ちあふれた。「師の

命である寺門の復興と、佛の誓である社會の救濟。」この二大誓願に燃えた彼は堅い決心を面に現はして雄々しく立上つた。

それから後の月僊は、目前の褒貶ほうてんなど、もとより眼中に置かずに、得意の彩管をふるつてはたゞ資金の蓄積に獨力奮闘したのだ。

數年は過ぎた。先づ世人を驚かせたのは寂照寺の大普請である。壯大な本堂、庫裡の外、經藏から山門に至るまで盡く新築せられ、猶永代修繕料として五百金を備へるに至つた。

かく當面の問題を解決した月僊は、更に社會救濟の爲に永遠の策を立てた。それは餘財千五百金を山田奉行に託し、其の利子を以て宇治・山田及び近郷の貧民を救助したのである。世に月僊金、又は寂照寺金と稱へられたのは是であつて、その恩澤に浴した者は決して少くはなかつた。

「志あるところ事遂に成る。」



乞食と嘲られた月僊は、遂に上人とまで崇められ六十九歳で此の世を去つた。

中之町を通る人々は「月僊上人遺蹟」と刻まれた美しい碑を道端に仰ぐであらう。寂照寺は今もなほ法燈明らか、月僊の餘徳を物語つて居る。

三九 濱 萩

ものゝ名も所によりてかはりけり

難波の蘆は伊勢の濱萩

その伊勢の濱萩とは、五十鈴川の下流二見の郷に生えてゐる片葉の蘆のことである。

古く歌集に記してあるものを上げると、

萬葉集

碁の檀越が伊勢の國に往く時

留れる妻が詠める歌

神風の伊勢の濱萩折伏せて

たびねやすらむ荒き濱邊に

山家集

西行

鹽風にいせの濱萩ふせばまつ

穂末に波のあらたむる哉

御集

順徳院

風寒み日數もいたくふる雪に

人やはをらむ伊勢の濱萩

これによつても古くから人々に知られてゐたことがわかる。

この濱萩は、三津湊からの人江に一面に生ひ茂つてゐたといふことである。近頃堤防を設け、潮を塞いで、新田を開いたが、此の

舊地を保存するため、僅かに數坪の地が残されてゐる。勢陽雜記に「最も名高い致景の所も、かく淺ましくなり待るなり。此の後跡方もなく、風の音さへ無くならむこと心あらむ人いかでか悲しまざらむや。」と古人もなげいてゐる。



(ルヨ=誌勝名都神)圖之萩濱

今も年々其の數を減じ、往古の面影の存して居らぬのは、誠に遺憾のことであるが、我が古い歴史を物語る濱萩のあることは、土地の記念であり、誇である。

### 四〇 足代弘訓



像肖訓弘代足

文化文政の時代はきはめて太平無事であつたが、その裏面には上  
下たゞ安逸奢侈に流れて士風  
自らくづれ、役人も生活に苦  
しみ商人から借財してやうや  
く體面をつくろふてゐた。  
かくの如き世に人心の腐敗墮  
落を戒め、皇化を冥々の中  
に扶植した人は足代弘訓であ  
る。

弘訓は寛居と號した。

五歳のとき外宮權禰宜となり、長じて萬葉學者宇治久老と本居大

平とに古學を學び、龜田末雅について神事を、本居春庭について詞ことば八衢やちまたの蘊奧を極め、當代の學者塙保己一・香川景樹・齋藤拙堂・大鹽平八郎等と交り大いに知見をひろめた。

其の説く所は實用の學問であつて、「學問は書物を讀み候上のみならず實に我が身に行ふ上にあり。」と稱し、當時の人心の警醒匡救につとめたことが學問料趣意書・粥の施行によつてもうかゞはれる。

文政の頃から物價は一日々々と騰貴し、中にも米價の暴騰甚だしく生活難の聲が高くなつた。此の如き時凶作が打續いたら人々は益々困窮するに相違ないと思ひ、人々の救済のため學問料といふものを案出した。

此の學問料は富裕な家から金の喜捨を受け、凶年には生活に苦しむ人々を救ひ、平年には苦學生の學資にあて、教育を奨励する心

算であつたが、是れは殆んど出來上らうとして成就しなかつた。

學問料は不調に終つたが匡俗驚醒のことは怠らなかつた。弘訓は天保二年幕府へ直訴し、神都の積年の習弊を矯正することにつとめ、同三年江戸から三年振で歸田すると世は凶作となり、東北地方は殊に甚だしく大風に續くに大洪水の災害にあひ、一粒の米もとれぬ慘狀を呈した。米價は上る。それにつれ物價は騰貴し人心は荒びに荒んで社會は眞に暗黒の状態となつた。

天保四年の冬、飢饉の時詠める歌に

目の前に見るのみになりぬたのみなき

世のわびしさの昔語りを

うえ寒き世にあるしづが冬ごもり

雪もなげきもさぞつもるらん

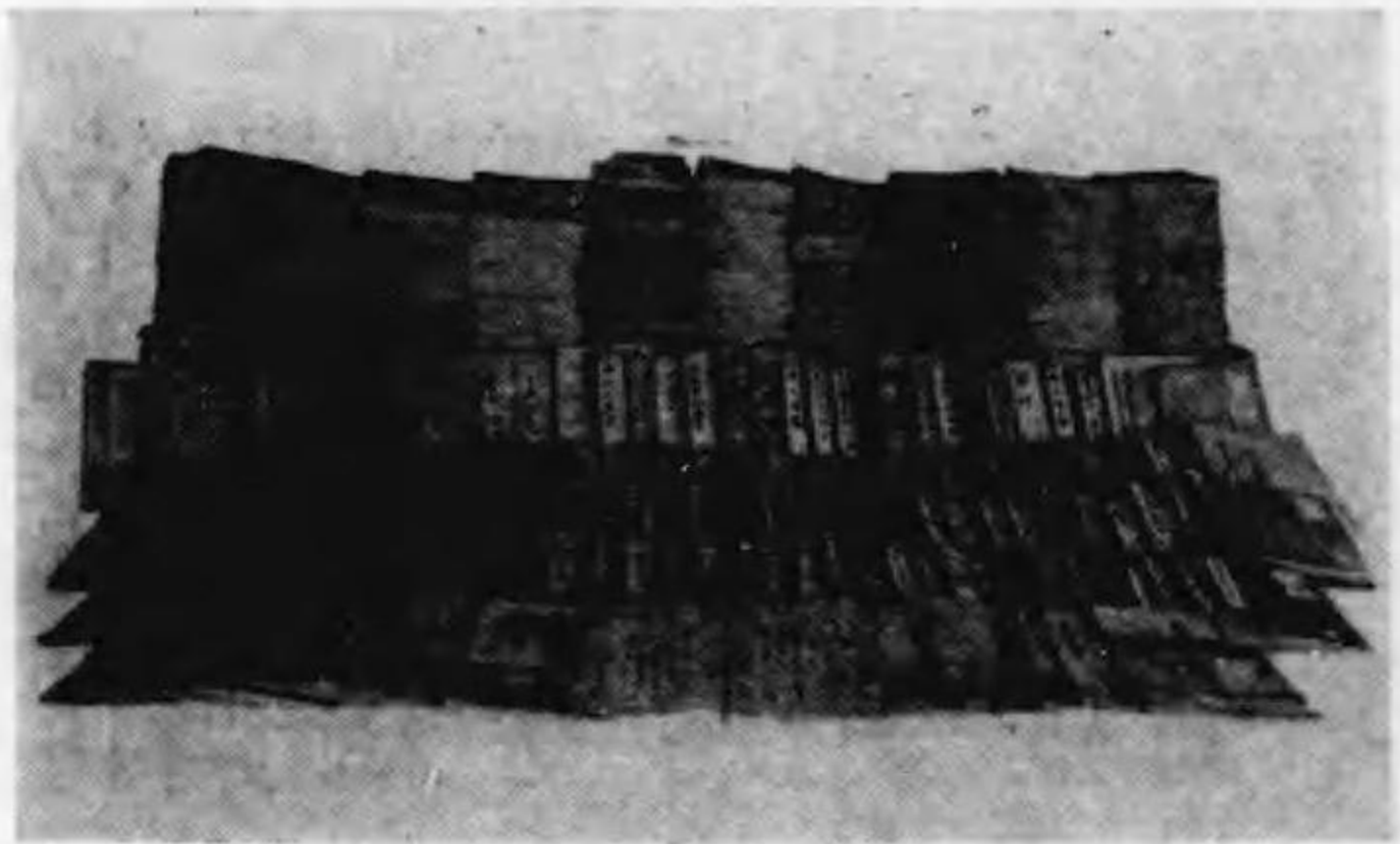
等がある。是等の歌を世に公にし、或は親友に匡俗の策を問ひ等

有造館  
津藩の學校

する間に救荒思想を宣傳して、世人に自覺を與へたことも多い。天保四年は過ぎ去つたが米價は下らない。特に山田は高價で人々は餓死しようといふ有様であつた。その上疫病さへも流行して哀な状態であつた。弘訓は之を見るに忍びないので度々安濃津に往來し、米千俵を請ひ受けて救濟の料とした。之れがために嘗つて狩野掖齋から貰つた大切な貞觀政要寫本二部を有造館に寄贈してしまつた。

天保七年夏に至り、大雨降りつゞくや、本年の米作不良の見込のため、米價は騰貴し當路の官吏は種々の策を立て、禁令を發し、米價の調節を圖つたけれども、米屋は暴利を貪り、米價は益々高くなり、大阪の如きは白米一升二百文となつた。此の時も弘訓は奉行や三方にはかつて窮民救濟につとめた。天保八年には正月から五月にかけて、近親の人々と共に粥を作り窮民に施行した。

弘訓は此の如き救濟事業をなした上に神典・國史・律令の類を考證して、千有餘卷の書物を編輯し、但馬・生野等の地方に行つて



足代弘訓ノ著書

は國學の講義をなして皇道を冥々の中に扶植した。是で其の名益々世にひろまり、朝廷では國史の御會を行はせられた時など三條實萬公から其の著書を奉るやう命ぜられ、又勅命によつて考證し或は撰んで奉つたものもあつたから其の勞をねぎらつて仁孝天皇から御硯を御下賜になつた。晩年洋夷の猖獗を憂ひ、博く國史を考證し、人心を嚮導して皇道の鼓吹をな

した點も亦大いなる功績であつた。弘訓常に自ら警めとしたこと、又は弟子共に諭したことで後の人

安政三年十一月五日卒  
享年七十三  
墓は山田停車場の北隣にあ

の心得となるものが多い。其の中の二三を記さう。

自警 七 則

人をあざむくために學問すべからざる事。  
 人とあらそうために學問すべからざる事。  
 人をそしるために學問すべからざる事。  
 人のじやまするために學問すべからざる事。  
 己が自慢するために學問すべからざる事。  
 名を賣るために學問すべからざる事。  
 利を貪るために學問すべからざる事。

ある初學の人に答へし書狀

稽古に素人稽古と黑人稽古と有之候。黑人稽古は梯子の段を一段づゝ登り候如し。登り易くして怪我など致し候危げなし。素人稽古は梯子の段を二段づゝも三段づゝも登り候が如し。至つて

登りにくゝ多分は登り損じて怪我を致すものなり。素人のくせに藝の出来ぬ内より氣ばかり高くなり無理など致し候故、生涯まことによき事は出来申さず候。一足づゝ行く者は、一日に十里の道を歩み、いそぎ走る者は四五町にて疲るゝが如し。すべて學の道は心をゆるやかにして無理に急ぐべからず云々。

同

すべての事人間の致し候程の事は出来ぬと申すことは無之候。稽古の仕様悪しく候と、熱心無きとによつて出来ぬ也。田舎稽古素人稽古、金持稽古、慰み稽古にては何の藝にても出来難し云々。

和歌

述懐

事しあらば火にも水にも入らんとは  
 思ふものから身は老ひにけり

同

いかにせん學の道のこまくらべ

競ふもいやし後るゝもうし

祭政惟一

我が國はいともたふとし天地の

神のまつりをまつりごとにて

四一 今様

足代弘訓

春

みもすそ川も氷とけ

高倉山もかすむなり

内外の宮のへだてなく

榮ゆる春になりにつけり

二見の浦

二見の浦の立石は

動かぬ國のかためにて

とこよの波のしき波は

君が八千代の數ならし

四二 神都學藝概観

神都には古くから文學が發達した。

和歌は藤原定家卿が勅を奉じて撰んだ新古今集に

五月雨の雲の絶え間をながめつゝ

窓より西に月を待つかな

の一首を收められた荒木田氏良を始め、僧蓮阿・荒木田成長・同

女・荒木田延成・同延季等數多の歌人が輩出して、何れも其の名歌

は千載集・新古今集其の他の勅撰歌集に載せられてゐる。降りて明治の中葉、橋村淳風は宮中御歌會始に

みつぎものゆるされし世の煙にも

たちまさるまで國は富みけり

の歌を詠進して預撰の光榮に浴した。

俳句は血なまぐさき戰國爭亂の世の初、荒木田守武出で伊勢俳諧の始と稱せられる。

飛梅やかろかろしくも神の春

の如き洒落にして上品な飛梅千句など幾多の名吟があり、我が國文學史上俳祖と仰がるゝに至つた。而して其の流を汲む者に杉田望一があり、杉木美津女・度會園女に同じ派を傳へてゐる。

神都俳壇の重鎮岩田涼菟は蕉門から出て神風館の第三世を繼ぎ、其の門に中川乙由がある。乙由の門大いに振ひ三浦樗良を出して

ゐる。神風館は足代弘氏に始つて連綿十六世、神都俳壇の一角を領してゐる。

神典の研究も古くから行はれ、神道五部書の如き貴い書が世に出た。鎌倉時代の中葉、度會行忠は神名祕書を著し、其の末期、同家行は類聚神祇本源を作つて、後世の所謂度會神道の基をなした。室町時代の中頃、藤波氏經は神典の研究保存に力を盡し、江戸時代の初頃出口延佳は卓勵風發畢生の心血を神典に傾注した。子延經之に繼いで家名を墜さなかつた。尙此の前後河崎延貞・橋村正身等の神學者が輩出した。幕末に至つて足代弘訓は一種の學風を鼓吹し、御巫清直・藺田守宣は神典の研究該博精緻を以て名高い。國學に於ては加茂眞淵の門人で本居宣長と双壁と稱せられた宇治久老、博覽強記で語學の造詣深かつた藺田守良等相次いで出て、多くの書を著し世を益した。

又漢學に於ては志毛井及時、河崎敬軒等篤學の士續出して、後進を誘導した。

書道には蒔田必器・小俣蟻庵・松田雪柯等があり、丹青には僧月僊・岡村鳳水・林棕林・水溜米室・磯部百鱗等がある。

又龍尙舎が夙に一種の神佛一致説を唱へ。慶徳麗女が閨秀文學に氣を吐いたが如き神都學界の異彩である。

我が國中古に大學國學の制あり、權門勢家に私學の設立を見たが、武家の世となつては學術が一般衰へた。此の間我が神都の地にあつては、比較的平和な生活を營むことを得た神宮奉仕の家々によつて、地方の文化が維持された。吉野朝の初に内宮禰宜荒木田經延が宇治岡田の宿所に文庫を建設したのも此の頃としては珍しいことであつた。併し惜しいことには其の後焼失して中斷の止むなきに至つた。徳川氏の治世に入つて寛永・慶安の頃、外宮禰宜出

口延佳は神學復興の志切にして、同志與村弘正・岩出末清等と相圖り、同志の醜金を以て豊宮崎文庫を創設し子弟教養の道場に充てた。

ついで貞亨年間内宮にも丸山に文庫が設置されたが、其の地卑濕のため、林崎の地に移し林崎文庫と稱した。天明年中に至り蓬萊尙賢僚友と謀り大いに書庫講堂塾舎等を増築した。

かく兩々相俟つて古今の典籍を保藏し、祠官の子弟を教養して來たが、明治に至り兩文庫の藏書は全部神宮文庫に獻納した。

倉田山、御幸通東側丘上に立つ神宮文庫は、大正十五年一月宇治館町より移轉開館したもので、古書珍籍の數實に九萬九千八百餘冊を算し、我國稀な寶庫となつてゐる。

#### 四三 神都の沿革



本市は古昔山田ヶ原と稱し、大神宮御鎮座あらせられしより神國又は神都とも稱し、二千年來の光輝ある歴史を有する日本最古の都市なり。源賴朝以來守護使不入の地と定められ、明治維新までは特殊の自治制度たりき。今其の大要を擧ぐれば左の如し。

飯野

今の飯南郡の一部  
有爾の鳥墓  
今の多氣郡  
明星村

垂仁天皇の二十六年皇大神宮を五十鈴の川上に鎮祭せらるるに當り、伊勢國造の支族大若子命、自領なる土地即ち後世の所謂飯野・多氣・度會三ヶ郡を神領として奉獻せしかば、其の地を特に神國と稱し、大若子命を神國造兼大神主に任じ、有爾の鳥墓に神庖を設け、神宮の祭祀と神國の政務を兼行せしめられ子孫其の兩職を世襲せり。

竹郡

後に多氣郡と改む

孝德天皇大化二年國造以下凡土地人民を私有する者に令して、悉く之を朝廷に返上せしめ、天下を擧げて郡縣の制に改められし時、神國も亦其の内の十郷を度會郡とし、残りの十郷を竹郡とし、各

高河原  
今の宮後町

大領・小領を任命せられしも其の神領たることは舊の如くにして、公郡に編入せられず、大若子命の末裔たる大神主吉田、猶二郡の政務を執行せしが、同五年有爾の鳥墓なる神庖を山田ヶ原沼木郷高河原に移し、大神宮司を置き神庖を御厨と改稱し、大神宮司を更任して、二郡其の他諸國の神戸の政務を執行せしめられしかば、大神主吉田は専ら神宮の祭祀をのみ掌ることとなり、祭政始めて分離するに至れり。

宇羽西村  
今の小俣町

桓武天皇延暦十六年八月山田ヶ原高河原なる神庖を度會郡湯田郷宇羽西村に移し、齋内親王の離宮をも併設せしかば離宮院とも稱し、一時伊勢國司或は齋宮寮頭をして諸國の神税を檢納せしめられしことありしも、數年或は十數年にして大神宮司の職權に復せられしなり。

然るに醍醐天皇の延喜年代の祭主たる人、神領政治を執行せしよ

り、大神宮司の権限漸次に縮少し、崇徳天皇の天治頃に至りては全く祭主の権力に移りたり。

又神領に關しては、天智天皇の三年多氣郡の四郷を割きて飯野郡と稱し、公郡に編入せられしも、宇多天皇の仁和五年三月同天皇御一代の間、神領に寄進せられ、同天皇の寛平九年九月更に永代神領に献上せられたり、後朝廷より上られたる神領左の如し。

朱雀天皇天慶三年八月、伊勢國員辨郡と尾張國三河國遠江國各十戸。

村上天皇應和二年二月、伊勢國三重郡。

圓融天皇天祿四年九月、同國安濃郡。

後一條天皇寛仁元年十一月、同國朝明郡。

後朱雀天皇長曆二年七月、三河國近江國美濃國上野國各二十戸。

後冷泉天皇永承三年十二月、尾張國近江國美濃國信濃國各二十

五戸。

後鳥羽天皇文治元年九月、伊勢國飯高郡と尾張國三河國遠江國各十戸。

是より度會多氣飯野の三郡を神三郡と稱し、これに員辨・三重・朝明・安濃・飯高の五郡を加へて神八郡と云へり。

神領は、此の外に倭姫命皇大神の大宮處をもとめんが爲に、諸國を御巡回あらせ給ひし時、國造等より奉りし地あり、源平以下諸將の献りし所あり、年を追うて廣大となりしなり。

然るに平清盛、志摩國に亂入せし源氏を撃退せんがために、神三郡へも兵糧米を課せしより、諸國の武士亦附近の神税を横奪し、有名無實の神領多くなるに至りしかば、兩宮禰宜等其の非分を上訴し、神領の興復に努めしも、武士の權勢益々盛にして、其の効なかりき。源賴朝政權を掌握するに至り、諸國に守護を置きしが、

神領は特に守護使不入の地とせしも、その横奪は益々甚しく、北畠氏の伊勢國司たりし時代の神領は、僅に度會郡宮川以東の地及び多氣郡齋宮・飯野郡相可等に過ぎざりしなり。當時祭主の權力亦微弱となりて、政權は宇治山田の豪族の手に移りしが、後世に至り宇治會合年寄・山田三方年寄と稱する者、自治政體を組織し、北畠國司並に織田豊臣兩家の監督を受けて、各其の區域を支配することゝなれり。

徳川時代に至り、宇治年寄・山田三方等の請願によりて、山田奉行を置き、年寄等の施政を監督せしめしが、明治元年七月山田奉行を廢し、度會府を設けらるるに至りて、この特殊政體は全く停止せられたり。

同二年七月度會府を廢して度會縣と改め、同四年十一月鳥羽・久居・度會の三縣を廢して更に度會縣を設け、同九年四月度會縣を廢

して三重縣に合併せられ、同十二年二月郡制施行の時、宇治山田三十ヶ町は度會郡に屬し、同二十二年四月市町村制實施に當り、宇治・山田を合併して宇治山田町と稱し、同三十九年九月市制を施行して宇治山田市と改稱したるなり。

### 四四 統計に現れたる神都

#### 位置、面積

位置	面積	廣	袤
東經 一三六度四二	北緯 三四度四二	七〇、九三平方杆	東西 三新五 南北 一三新八九

#### 戸數、人口

年	戸數	人口		備考
		男	女	
寛永二十年	九、三三三	一五、九九五	一八、七四二	三西、七〇一
明治十五年	六、〇八七	二二、二四四	二二、九六七	二五、二〇一

現住人口職業別		(昭和六年十二月調)			
區別	戸數	有業者	家族	計	
全	六,九三〇	一七,六四四	一七,七八	三五,三六二	市制施行當時
大正九年	八,一三三	一九,一九〇	二〇,〇八〇	三九,二七〇	第一回國勢調査
昭和五年	一〇,四三三	二四,三六五	二六,二二〇	五〇,三八五	第二回國勢調査
農業	三四九	八六七	八八五	一,七五二	
水産業	三五	七七	一〇六	一八三	
鑛業	一	一	一	二	
工業	二,七四四	六,二三五	八,四八一	一四,八六六	
商業	二,六三三	六,九七九	七,五五〇	一四,五九九	
交通業	七五二	一,一二二	二,三九〇	三,五〇二	
公務自由業	一,四三九	二,〇四九	四,三六〇	六,四〇九	
其他有業者	八五	九六八	二,二二八	三,一八六	
家事使用人	二六	三六五	八〇一	一,一六六	
無職業	一,一四一	一,二〇九	二,一一〇	三,三三九	
計	一〇,二〇四	一九,八五三	二九,〇六一	四八,九二四	

生産物總額

市經濟	歲入	歲出		一戸平均
		經常費	臨時費	
明治三十八年	四三,〇八四 <sub>円</sub>	三五,八五 <sub>円</sub>	七,二五九 <sub>円</sub>	六角三八
全 四十五年	一〇一,三〇三	八五,五五六	一五,七七七	一〇,八三七
大正十年	三九,七六四	二五,二六七	一四,二五七	四八,〇〇〇
昭和六年	四六,一九二	三四,二四	一一,〇六八	五二,三五二
全 七年	五五,五七一	三四,八九二	三二,六七九	五四,五四四
農産	三六,八八 <sub>円</sub>	一九九,二七〇 <sub>円</sub>	一五七,一八四 <sub>円</sub>	一九,六九 <sub>円</sub>
畜産	一一,三九六	一八五,一五二	一八〇,三五六	一七,二四九
林産	三五,〇五四	三三,四八八	三四,〇一七	三五,三六
水産	四六,二四五	三四,三二二	三三,九七七	三一,五三
工業	一六,七三二,九六七	一六,五六八,〇五九	二一,六七三,〇三二	九,三九二,六七〇
計	一七,二九七,〇〇〇	一七,〇一九,二八〇	二二,〇七七,五五	九,七五二,六五〇

教育費 (小學校)		經常費	臨時費	一戸平均	兒童一人平均
明治三十八年		二〇、七六 <sub>四</sub>	一、一五 <sub>四</sub>	三 <sub>四〇</sub> 五 <sub>二</sub>	六 <sub>四</sub> 一 <sub>八</sub> 七
全 四十五年		三七、〇一一	四二	五、〇五〇	七、八八 <sub>四</sub>
大正十年		一〇七、三七		一三、一四六	一九、三五〇
昭和六年		一三六、七三	九五、四二一	一三、三五	二〇、二〇〇
全 七年		一四二、五五	一〇八、六六	一三、九七〇	一八、九〇〇
租 稅		國 稅	縣 稅	市 稅	計
明治三十八年		一四三、四七 <sub>四</sub>	二八、二八 <sub>四</sub>	二八、二九 <sub>四</sub>	一九八、八四 <sub>四</sub>
大正十四年		三三、八四 <sub>八</sub>	二三八、四〇 <sub>八</sub>	二八四、二七〇	七四四、五五 <sub>六</sub>
昭和四年		一六八、九〇	二三四、八 <sub>九</sub>	三〇七、〇一一	七二〇、八一〇
全 五年		一七四、七六	二三五、三 <sub>五</sub>	二九三、六 <sub>八</sub>	七三三、七 <sub>九</sub>
全 六年		一五、四 <sub>五</sub>	二七、四 <sub>二</sub>	二八〇、九 <sub>二</sub>	六四四、八 <sub>二</sub> 九

租稅負擔割合 (昭和六年度)

神宮參拜人員		昭和三三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年
内 宮		一、三五、八六 <sub>八</sub>	一、七五、一六 <sub>六</sub>	一、四五、二八 <sub>二</sub>	一、四五、〇四 <sub>二</sub>
外 宮		一、五三、四 <sub>二</sub>	二、〇八、八 <sub>三</sub> 四	一、七六、二 <sub>三</sub> 三	一、七六、九 <sub>〇</sub> 二
宿泊人員		昭和三三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年
旅館數		二五	四八、五 <sub>六</sub> 八	四四、三 <sub>六</sub> 八	三六、八 <sub>四</sub> 七
鐵道旅客調					
		昭和五年	昭和六年	昭和五年	昭和六年
山 田 驛	乘 車	九七四、九九	八六九、五 <sub>四</sub> 五	一、〇六、七 <sub>三</sub> 三	一、〇〇一、〇 <sub>九</sub> 三
山田上口驛		二五、四 <sub>三〇</sub>	一七、九 <sub>〇</sub> 四	二三、八 <sub>六</sub> 八	一五、一 <sub>七</sub> 六
參急宇治山田驛		—	二〇四、四 <sub>八〇</sub>	—	一五九、四 <sub>六</sub> 四
國 稅		縣 稅	市 稅	計	
一人割		三 <sub>四</sub> 一 <sub>九</sub>	四 <sub>四</sub> 四 <sub>五</sub>	五 <sub>四</sub> 七 <sub>四</sub> 三	一三 <sub>四</sub> 三 <sub>六</sub> 六
一 戸 割		一五、三 <sub>二</sub>	二、三 <sub>一〇</sub>	二七、五 <sub>三</sub> 二	六 <sub>四</sub> 、一 <sub>七</sub> 三

學 校	設立區別	校 數	教 員 數		生 徒 數
			普通科	本 科	
全 山 田 驛	官 立	一	一	三	三三〇、〇五七
全 外 宮 前 驛	官 立	一	一	三	二四、九六八
伊勢電 大神宮驛前	官 立	一	一	三	二〇三、一八一
計		七	七	一六	一、八四五、三〇〇

(昭和七年四月調)

圖書館閱覽者調	閱覽人員	最多(八月)	最少(二月)	一日平均	藏書冊數
神宮皇學館	官 立	三、二五九	三、八四七	二、〇二五	一、三三三
中 學 校	縣 立				四、七六
商 業 學 校	全 市 立				
高 等 女 學 校	全 市 立				
尋常高等小學校	全 市 立				

### 四五 大神都特別聖地計劃

本市は昭和八年二月一日付を以て、左記大神都特別聖地計劃實施に關する意見書を内閣總理大臣及内務大臣に提出した。而して神宮聖地計劃國營建議案は第六十四議會に於て貴衆兩院とも全會一致を以て通過したから神宮周圍の宮域は面目を改めてこゝに完全なる聖地を現出し、之に順應して理想的大神都の建設さるゝも餘り遠くはなからう。

本市ハ都市計劃法ノ定ムル所ニヨリ昭和二年三月二十三日都市計劃實施ノ指定ヲ受ケ次テ同四年十一月二十八日宮川以東舊神領地ヲ包容スル一市七ヶ町村ヲ一區域トスルノ認可ヲ得爾來縣市共同シテ専ラ道路網ノ調査實測中ニ在リ  
 熟々惟ミルニ本市ハ畏クモ 皇祖 大神宮鎮座坐シ二千年來 皇

室及國民ノ崇敬ヲ鍾ムル全國無二ノ靈地ナリ近クハ 明治天皇ヲ始メ奉リ 大正天皇 今上陛下共ニ再度 行幸親謁ノ盛儀ヲ舉ゲサセ給ヒ 皇族各殿下ハ申スモ畏シ一般民衆ノ參拜ニ至リテハ每年數百萬人ヲ算シ而モ猶ホ年一年増加ノ趨勢ニ在リ之ヲ我國體ニ鑑ミ之ヲ我國民性ニ照シ當然ノ歸結ナリト雖モ洵ニ心強キ極ナリ然ルニ此ノ趨勢ニ順應シテ交通運輸ノ利便ハ固ヨリ接待慰安ノ施設ヲ如何ニスヘキヤ一念茲ニ至レハ本市ノ都市計劃タル一般都市ト全然其ノ選ヲ異ニシ獨リ市民ヲ目標トスヘキニアラス畏クモ皇祖鎮座ノ神域トシテ 皇室及國民禮讚ノ靈場トシテ將タ全世界人ノ讚仰聚樂ノ一大聖地トシテ極メテ適切必須ナル所ノ諸般施設ヲ完成スヘキ特別計劃ニ出テサルヘカラサルコトヲ直感スヘク是實ニ必然萬口ノ一致スル所ナルヲ信ス

先年神苑會ノ丹精ニヨリ 内宮外宮ノ神苑ヲ擴張シ倉田山公園ヲ

開キ徵古館農業館ヲ設ケ又縣營ヲ以テ 兩宮聯絡ノ坦道ヲ通シ並宇治橋外苑ヲ造成シタルカ如キ實ニ國家國民ニ對スル一大貢獻ニシテ吾人ノ深ク徳トスル所而モ時運ノ進歩ハ更ニヨリ以上ノ擴張改良ト新ナル施設ヲ要望シテ已マサルナリ

宮内省ニ於カレテハ夙ニ 離宮造營ノ必要ヲ認メラレ既ニ敷地ヲ決定シ土功ヲ竣ヘ進ンテ建築ニ着手セラレントス是實ニ市民ノ本懷ニシテ深ク欣榮トスル所ナリ

翻テ本市ノ沿革ヲ考査スルニ古來 神宮ノ掟トシテ庶民奉齋ノ爲メ別ニ師職ヲ置キ宿坊ヲ兼ネテ神樂ヲ奉奏シ神符ヲ授與シ加之每年大麻及曆ヲ全國ニ頒布セリ初穂料ノ寄進年額數十萬兩ヲ下ラス徳川治世師職ノ數字治三百山田五百ヲ算セシ記録アリ又年始及春時ニハ參宮者全市ニ溢レ市民ヲ舉ケテ之カ接待ニ任セリ然ルニ明治維新後神宮司廳ノ創設ト共ニ師職ヲ廢セラレ次テ鐵道ノ開通ニ

ヨリ市民日常生活ニ一大變遷ヲ來セリ時世ノ推移如何トモシ難シト雖モ市民ノ天分タル 神德ノ發揚參宮者接待ノ資源タリシ古來ノ特惠餘澤ハ自然ニ解消シ去リ之ニ伴ヒ多數ノ業態モ亦參宮者ト相離ル、ノ現狀ヲ馴致シ到底市民ノ獨力ヲ以テ大神都建設ニ任スル能ハサルハ吾人ノ轉々感慨ニ禁ヘサル所ナリ

然ルニ現下ノ國狀ハ内ニ在リテハ國難打開ノ爲メニ益々舉國一致發奮努力ヲ肝要トシ殊ニ思想ノ動搖ニ對シテハ最モ戒心ヲ要ス外ニ在リテハ國際聯盟ノ紛糾ニ拘ハラヌ大陸發展ノ鍵ハ既ニ開カレ大和民族ノ使命ヲ發揮シテ世界遍照ノ大皇道ニ邁進スヘキ絶好ノ機運ニ逢着セリ此時ニ當リ一層全國民ノ參宮ヲ獎勵シ 皇祖ノ大御前ニ拜跪シテ萬代不易ナル我國體ノ真髓ニ觸レ悠遠神秘ナル我建國ノ由來ヲ如實ニ體得シテ益々忠君愛國ノ志操ヲ堅實ニシ愈々義勇奉公ノ精神ヲ發揮スルハ我國爲政家ノ特ニ留意スヘキ一大要

諦ニアラスヤ乃チ全世界ニ誇ルヘキ大日本ノ一大聖地トシテ神都施設ノ完成ヲ圖ルハ現下ノ國狀ニ照シ最モ有意義且ツ緊切ノ事ナリトス

大神都特別聖地計劃ノ爲メ特ニ着眼スヘキ要項左ノ如シ

- 一 神宮ヲ中心トシテ神苑、防火地帯、廣場、市街、遊園地ノ區劃、配地及整備並縱橫貫通ノ道路網
- 二 汽車電車ノ路線及停車場ノ位置
- 三 參宮者ノ潔齋修養及講演等ニ充ツヘキ一大殿堂ノ建設
- 四 國體精華ノ推獎鼓吹ニ資スヘキ歴史館振武館及博物館等ノ建設
- 五 體育獎勵ニ充ツヘキ各種競技場ノ建設
- 六 大衆ノ接待慰安ニ關スル施設
- 七 外人ホテルノ設置
- 八 全市ノ淨化
- 九 其ノ他神都トシテ適切必須ナル事業

如上ノ諸施設ハ新興大日本ノ見地ニ立脚シ國家ノ事業トシテ斷然



大規模ノ計劃ニ出ツルコトヲ要ス則チ内務大臣ヲ會長トシ内務省  
神宮司廳、三重縣及宇治山田市ノ外斯道ノ造詣深キ貴衆兩院議員、  
官公吏、學者、實際家ヨリ委員ヲ選任シ特別ノ機關ヲ設置シテ之カ  
研究調査立案ニ從ヒ向後凡十ヶ年ヲ期間トシ其ノ完成ヲ期スヘシ  
庶幾ハクハ閣下明鑑 惟神ノ大道ニ立脚シ 皇祖肇國ノ神慮ヲ奉  
體シ建國ノ大精神ヲ基準トシテ 神宮ヲ中心トスル一大聖地建設  
ノ廟議ヲ決定シ速カニ之カ實行ヲ期セラレンコトヲ  
茲ニ市會ノ議決ヲ具シ敢テ丹心ヲ披瀝ス 敬白

昭和八年二月一日

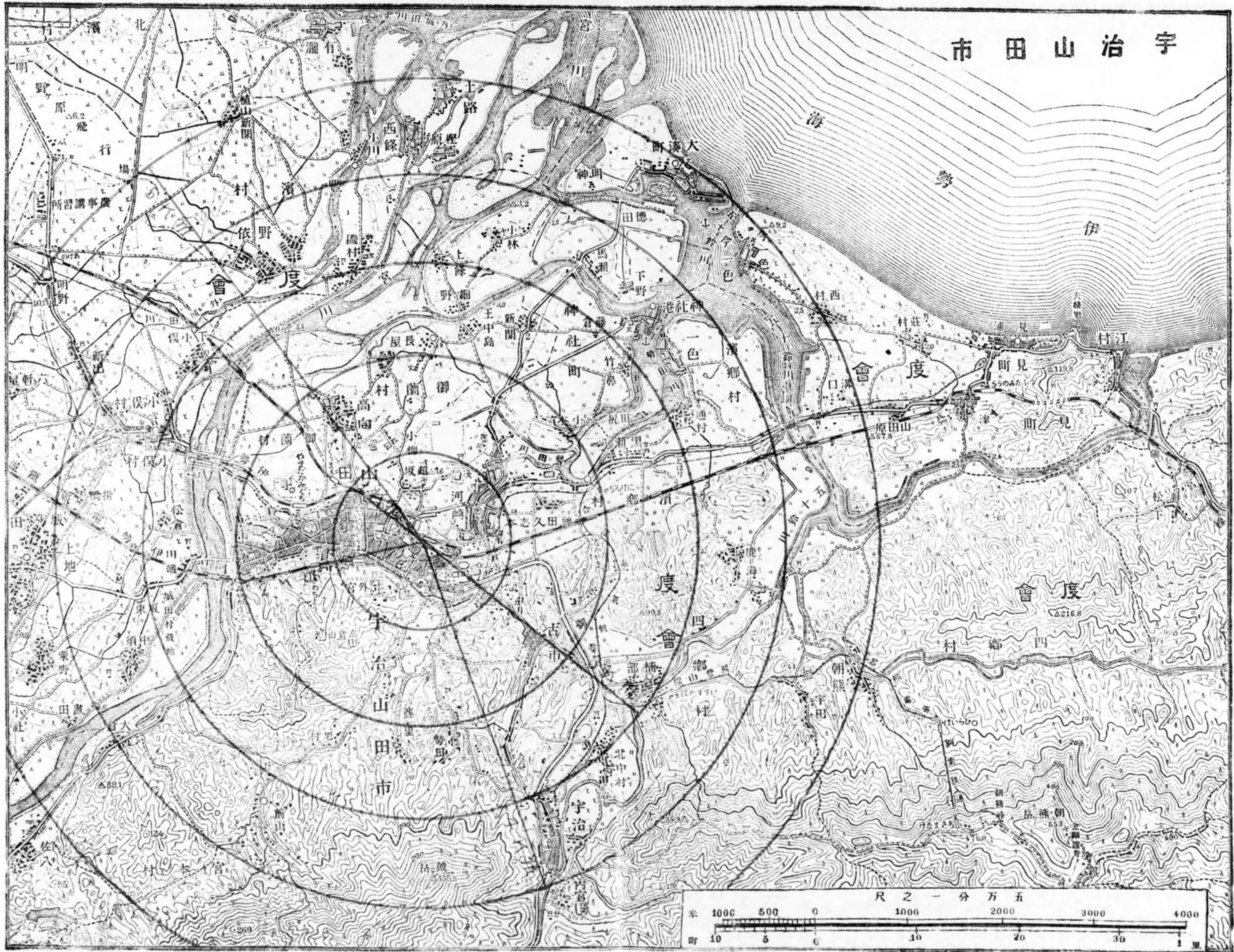
宇治山田市長 福地 由廉

内閣總理大臣子爵 齋藤 實殿

内務大臣男爵 山本 達雄殿 各通

神都讀本終

宇治山田市



昭和八年三月二十八日印刷  
昭和八年三月三十一日發行

【非賣品】

著作兼  
發行者

宇治山田市教育會

印刷者

宇治山田市一―二番地  
奧村正二郎

印刷所

宇治山田市一―二番地  
神都活版所

發行所

宇治山田市教育會

終

